

2050年東京の将来像

1	2050年には後期高齢者となっていることから、懸念なく大らかに過ごせる環境であって欲しい。温暖化は更に悪化していると思われるため、水や緑を活用し、強い太陽光や熱の影響を受けない環境が必要である。食については空家の増加が想定されることから、農地を回復し、東京産の食材を今以上に手軽に食せる状況であって欲しい。
2	都市農地、雑木林等の緑地の保全を進め、これ以上緑地を減らさない政策を導入していただきたい。これまでの開発優先の時代を転換すべく、開発に当たって義務付ける保全緑地比率の拡大、緑地を保有する地主に対する税制配慮、緑地買取等あらゆる手を使って、何とか緑地を残していただきたい。それが喫緊の課題となっている生物多様性、地球温暖化の危機対応としても合致する方策と考えるものです。
3	東京に暮らす人勤めに来る人が、住環境／職場環境で自然を感じられる都市。 住宅街や都心の公園が単に樹を植えて管理されている場所では無く虫や鳥が集まりそこに生物多様性がある文化的サービスを楽しむことができる場所にする。 生態系の文化的サービスは必ずしも田舎の自然だけでなく、都市にも求められます。
4	都市計画法による土地利用の細分化が必要、国立国定公園外であっても国立国定公園に匹敵若しくはそれに準じるような土地もある。また市街化調整区域などは単に「街路形成しない」ではなくその自然度に応じた「自然環境保全」や「生物多様性の保全」が必要。また、単なる白色地区もこうした取組をし生物多様性の保全が必要だと思われる。
5	東京の自然環境について、多様な主体と連携した持続的かつきめ細やかなモニタリング体制が築かれ、そこから得られる科学的エビデンスに基づいた情報を活用し、長期的な視野にたった効果的な自然環境施策が実施されることで、意図的、非意図的にかかわらず東京都全体の生物多様性が保全、再生されている。
6	緑あふれるオフィス、自然派コスメや自然派フードを増やす。
7	都内の路上において、生物多様性毀損の原因の一部にもなっているポイ捨てゴミ（特に、60種類以上の発ガン性物質を含め200種類以上の有害物質を含み、そのフィルターは海洋プラスチックごみにもなっているポイ捨てタバコ）が全く無い状態が維持できている。
8	2050年までに海洋ゴミを0にする 地球環境の持続可能性へ水素で動く海洋ゴミ回収船を造ろう。これは、経団連加盟企業へ事業提案です。 趣旨 国連は2050年世界の人口は97億人に達し、食糧確保が難しくなりはじまると予測してます。現在より海洋生物に依存した食卓になります。日本の環境省は、世界の海に毎年800万トン。プラスチックゴミが浮遊していると発表してます。これは、海洋生物の繁殖を阻害してます。プラスチックゴミが自然分解されるまで数百年かかります。豊かな海ため、新事業は海洋ゴミを回収して、プラスチックを石油を資化して分解する微生物を使用、人工分解させてバイオマスプラスチックなどの有機資源へ再生して販売、流通させる事業を提案します。 1.水素で動く海洋ゴミ回収船を造ろう。 好感が持てる事例を紹介します。マレーシアに双胴船の一種でインターセプター002、これは海洋プラスチックゴミの自動回収船です。これを発展させて、水素を動力源としたマイクロプラスチックも回収できる海洋ゴミの自動回収貨物船を日本国産で造りましょう。手始めに、日本の産業船、漁船、個人所有船。の動力源を重油から水素に全て替えるべきです。方法は、既存の船を改修して収益を増やす仕組みを考えたいです。 2.全国の廃棄物処理場にプラスチックを微生物を使用した人工分解処理設備を造ろう。 全国に2039箇所、廃棄物処理施設はあります。全てで、プラスチックの石油を資化して分解する微生物による人工分解処理が出来たら地球環境の持続可能性において、世界は驚くでしょう。官僚と民間企業が協力して成功に向かい行動してください。
9	みどり豊かで安心・安全、そして快適なまち東京！

10	侵略的外来生物が可能な限り減っており、昭和初期を彷彿とされる生物相をもとにした生物多様性が維持されている。
11	<p>「豊かな自然があふれ生きものと共生する都市」という理念に総論として賛同します。都市域でも例えば明治神宮のように、植栽起源でありながら生物多様性の高い樹林が成立しうる自然のポテンシャルがあるので、緑の創出には意義があります。</p> <p>しかし、各論レベル、現場レベルでは、都市緑化として動いているいろいろな事業において気になるところはたくさんあります。例えば、第4章3の「東京における地形区分ごとの将来像」において、低地域のところで特出しで「都心のオフィスに創出されるグリーンインフラ・在来種の森」と挙げられ、これに対応すると思われる事業はすでに都内各地に散見します。ただ、実態としては園芸植物によって”緑で化かす”自然とは程遠い「緑化」や、「在来種」を謳っていても出所不明の苗木を使っていたり、当該地域に自生することが疑わしい「国内外来種」の導入だったりする事例が多いことを感じます。また緑地の管理についても、植栽した植物の育成は行っている、地域本来の自然の要素である自然侵入した在来種は除草や刈り払いされてしまうなど、本当に生物多様性の向上を目指しているのか疑わしい事例も多いです。</p> <p>「豊かな自然があふれ生きものと共生する都市」を口先だけにしないためには、「緑地の創出」について、植栽は厳選した植物種の、遺伝的に出所が確かな苗木をつかって最小限にとどめ、むしろその後の管理を適切に行って在来の野生植物の生育を大事にすべきです。また、緑地の創出や管理にあたって市民参加は重要ですが、単に手を動かすだけの作業をさせるのではなく、丁寧な観察などを伴う生物多様性の学びの場とすべきです。そうすることにより、市民にとっては身近な空間に質の高い自然を提供し、自然空間にとっては周囲の市民が管理の担い手として大切にしていけることが期待できるのではないかと思います。</p>
12	多摩の地域では、緑のあった敷地がいつの間にか宅地などに変わっていることがある。そこで、2050年には少なくとも今残っている緑や自然が維持されている状態を望んでいる。
13	民間の施設などに今でも残っている巨樹や巨木については、2050年になっても残っていてほしい。自然と結びついた史跡などは2050年になっても価値あるものとして残っていてほしい。
14	個人個人が環境や生物多様性に配慮した生活をここがけ、多くの人が環境問題に関心を持つことで、企業の意識が変わり、ひいては社会全体が持続可能な経済活動を行っている。
15	<p>都市部の建築物が密集している地域でも、生物多様性への配慮が浸透し、自然と調和した安らげる都市空間となしてほしい。</p> <p>ビル街にも自然が増えれば、仕事に行きたくない気持ちも少し減るかもしれない。</p>
16	<p>・外部との関係性の表現</p> <p>世界からあらゆる物資を取り寄せ消費している東京は、東京の中以上に、地球全体の生物多様性に対して大きな責任を負っていると感じます。このため、東京の将来像には東京そのものだけでなく、資源やエネルギーを調達している外部との関係性が表現されていて然るべきだと思います。具体的には、外部から調達されたものに対してお金以外に返っていくもの（人的交流や生ごみ起源の堆肥、再資源化しやすいリサイクル資材など）があって、モノも人もエネルギーも一方通行でなく循環が成立するようなシステムの確立が持続可能な社会には必要ではないでしょうか。</p> <p>・生物多様性に関する情報の拠点の存在</p> <p>東京の自然は豊かですが、開発にさらされてどんどん変化していて、気がついたら失われているものも多いです。変わりゆく東京の生物多様性の情報を蓄積・共有する拠点の存在が必要であると思います。</p>
17	<p>・人の手が入ることにより形成される自然環境を保全するため行政が主体的に管理を行っている。</p> <p>・外来種対策において、東京都と周辺県が一体となった対策を実施している。</p>
18	生物多様性や自然環境の維持・改善のために、自然環境の保全が、経済的に自立できるとよいと思います。現在は行政が費用を負担することで、保全を実施していることが多いと思いますが、民間が利益をあげながら保全できたり、行政でも負担にならずに保全ができるとよいと思います。エコツーリズムがその一例なのかと思います。

19	<p>人口減少時代において、緑地の保全は非常に重要である。これまでの生物多様性戦略の多くは、緑地の面積を確保することで保全戦略としてきた。しかしながら国際学会誌などでは、緑地面積ではなく、生物そのものの種数や量が人間へのWell-Beingに貢献しているとの情報が増加傾向にある。</p> <p>東京は世界的な大都市にもかかわらず都市公園や近隣山地の豊富なメガシティである。地域住民はその緑地を散策し、関係を持つことで日々の生活を回している。</p> <p>緑地を放置して保全地域とするのではなく、人間と緑地が積極的にかかわることで生物多様性を保全する施策を考えていくべきである。</p>
20	<p>都民一人ひとりの生物多様性や持続可能な社会を構築するという意志が強く、各個人が「自分が未来を創っていくんだ。だから今を大切にしよう」という当事者意識が強い人で構成されている社会。</p>
21	<p>動植物と人間が良い関係性を持ちながらも、経済発展をしている状態。</p>
22	<p>皆が、当たり前前に生物多様性に関する知識・関心を持って、行動している社会の実現</p>
23	<p>お台場という東京湾内奥と、波佐間という東京外湾の先端と、両端を毎月見ていることからの意見はいうことができます。いうまでもなく、外湾の波佐間は良い状況、お台場は、生物多様性という視点からは、ますます悪くなる傾向です。ご存じのように、お台場は、常時、夏は無酸素状態になり、その中で生き抜ける生物だけが生き残り、それも、特に悪い状況になると、逃げ去りますので、ドラスティックに種類が変わります。しかし、このところ、変わりたくてもかわりようがない状況ともいえます。</p> <p>1990年代に多かった外来種、イッカククモガニ、チチュウカイミドリガニは、お台場ではほぼ絶滅しました。マハゼ、ダボハゼ類（チチブ。アゴハゼ、フタオビシマハゼ）が生き残り、カニの類では、イシガニが生き残っていますが、めっきりとヤドカリが減りました。カレイの類も少なくなりました。多様性がどんどん失われていく状況です。</p> <p>また、覆砂のためピノスガイも絶滅したようです。ただ、だから覆砂が悪いとは言いません。ピノスガイの種苗を播いて、生育を見る実験をされたらいい、と思っています。アサリも牡蠣も同様で、お台場のような環境では、種苗を播いて、生育の実験をするような場所、環境だとおもうのです。生物の多様性が失われている場所に二枚貝を播けば、一時的には、爆発的に増えるのではないかと思います。都市環境では、人為的なコントロールをするべきだというのが自分の意見です。多様性とは遠いですが。多様性を取り戻すことは、人為的には無理でしょう。都市が都市であることをやめるわけには行きませんから。</p> <p>一種類を増やすことはできても、生物の多様性を維持して行くことは、本当にむずかしいことなのですね。そんなことを考えています。</p>
24	<p>各地形区分に寄り添い、自然や生き物と共存する都市 一時的なものではなく、持続的に自然を利用、提供することができる都市</p>
25	<p>野生動物が人の暮らしに害を与えない程度の距離感をもった環境の整備</p>
26	<p>ゼロドラフトにも書いてある通り、多様な自然環境（生態系）を保全していくための拠点が欲しいです。子供のころから東京に住んでいましたが（東京以外にも住んだことがあります）、身近な自然から島嶼地域に至るまで、様々な環境があることを体感できることが、それを守り保全しようという気持ちと行動につながると思います。</p>
27	<p>都民が自らが住む地域ならびに東京の自然環境を理解し、持続可能な都市づくりに向けた取組を継続的にを行い、里山の保全や地産地消など自然との共生を目指す。</p>
28	<p>日本人は、自然と人間との関係において、人間も自然の一部であるという考えの下に生活をしてきたと思う。しかし、現在の都市型の生活様式では、こうした自然との関わりといった意識が都民には薄くなっていると感じる。2050年という長期的な視点で東京の将来像を考える際には、一人ひとりの都民が、自らも自然界の一部であり、様々な生き物や植物などと共存しているのだ、という意識を持てるよう、学校教育や様々な啓発活動の場において、取り組みを進めていって欲しい。</p>

29	<p>自然の保全について、ウェルビーイングの観点を取り入れられ、日々の生活の中でより豊かな自然に触れることで生活の質が向上している。</p> <p>自然のもたらす効用（クロスセクター効果）が定量化され、より多くの行政・企業等が様々な手法により積極的に自然環境を保全している。</p> <p>多くの人が近くの公園等の管理・運営に気軽に携わることのできる機会が多く提供されている。</p>
30	<p>外来種をどこまで遡って線引きをするのか、理由も説明した上で、人間と生物の今後の関係を双方にプラスになる将来像を描いてほしい。</p>
31	<p>2050年には都立公園に於ける生物多様性の重要度が現在よりさらに増すでしょう。屋敷林などの民有地の樹林や草地は、相続問題などで細分化され、宅地化されていくことにより今よりもずっと減り、相対的に都立公園の自然はより一層貴重なものとなっていきます。そこで、都立公園の生物多様性保全・促進がどのように行われるかが、東京都の台地では生き物にとっても、都民にとっても鍵を握ることになります。</p> <p>それには、まず、都行政を担う現場の担当者が生物多様性の重要性に対する意識を変革していなければなりません。水域のかいぼりだけを重視するのではなく、陸域の樹林の育成とその周辺の草地の保全、そこに生育する生き物たちの保全を図らなければなりません。</p> <p>今から16年前に私たちの団体が都立公園の池の外来魚の調査をさせて欲しいと、公園管理担当者に願い出た時、「外来魚がいて何が悪いのかね？」と担当者に言われたことを考えると、かいぼりが行われて外来魚がかなり駆除された現在は都行政の担当者の方々の意識がこの10年ちょっとで確かに劇的に変わったと思います。</p> <p>しかしながら、逆のことも起こりました。かいぼり後にはかいぼりで再生した貴重な水草を守る為、作業するボランティアの安全を守る為、美しくなった池を来園者からよく見えるようにする為、とって池周辺の多くの樹木が伐採され、低木も膝丈まで強剪定されました。池の生物を守る為に陸上の生態系が壊されました。緑が失われ、そこに集まる虫たちも減少し、ウグイスやアオジなどの一般的な野鳥も激減しました。</p> <p>一方で、池周囲でなくても何かにつけて樹木を伐採したり強剪定したりし、災害による倒木があってもギャップでの実生を育てようとはせず、樹林の育成には殆ど無頓着な状態で問題は山のようにあります。全体としての生物多様性を考えた総合的な政策が必要です。</p> <p>このような都行政の在り方が変わって都立公園が豊かな自然を誇れるようになっていくことが、私にとっての2050年の将来像です。</p>
32	<p>森林の手入れを行うことによるバランスの調整の実現。主に島しょ部での絶滅危惧種の施設による保護、同時に外来種の駆除の大幅な達成。沿岸部の開発によって人工的な干潟や浅場の増設。海底へのドロの除去、浄化。</p> <p>義務教育での環境教育の導入。</p>
33	<p>ゼロドラフトに記載された東京の将来像に共感します。</p> <p>ただ、友人や家族などは都市型の便利な生活を当然のものと考えていて、理想像に描かれた内容はよいものかわかっていても、個人レベルで生物多様性の恵みに感謝するレベルに達するのは難しいかもしれません。</p> <p>ひとりひとりの小さな選択が生物多様性を守っていくと思います。生きていく上で欠かせない買い物などを通じて生物多様性への意識を落とし込めるように、行政・企業が協力し、都民にも意識がいきわたっている東京になってほしいと思います。また、最近の地形ブームなどの波に乗りながら、地域の歴史など多くの人が興味を持つ内容に関連付けるのもよいと思います。</p> <p>（例）スーパーや飲食店が生物多様性の恵みを感じられる場所となっている</p> <p>食品はすべて食べ物であることを知る場所となる（生産の背景などを知ることができる）→自然への畏敬の念が生まれる→食品ロスやプラスチック削減にもつながる</p> <p>地形や地域の過去の姿（農村・漁村）などから、失われた自然や生き物について学ぶ人が増える</p> <p>→残された自然を守るとともに、生物多様性へ配慮した選択をする人が増えている</p>
34	<p>都心でも、土の香りがする風が吹き、鳥のさえずりが聞こえる東京になっているとよい</p>

35	<p>先日初めて、白金にある自然教育園を訪れました。生い茂った緑のなかで鳥がさえずり、湿地や池には昆虫なども多く見られ別世界であり、感動し、癒され、生物多様性とはこういうことかと思いました。都心から二、三時間かけないとこうした自然に出会えないと思っていたので、とても貴重な場所だと思いました。そして、こうした緑や水辺は残そうと思わないと、すぐになくなってしまふのだなと、自然教育園を一步出たときに強く実感しました。将来ずっと緑や水辺が東京のあちこちにたくさんあって欲しい、守って欲しいと強く思いました。東京の将来像で描く未来は素晴らしいと思いました。</p>
36	<p>私は、生物多様性における、2050年の東京の将来像について、自然と人間が共生する環境にしていくことを提案する。東京における丘陵地や山地などの自然の課題として、ペット由来の外来種の増加による地域固有の生物の減少や、埋め立て地、都市開発によって野生動物の住処が徐々に減少している。</p> <p>東京の将来像として、自然体験を通して、自然の恩恵を感じることで、自然への意識の高まることが期待できる。東京は高層ビルが多く立ち並ぶ大都市であるが、都心から短時間で多摩などの大自然が広がる地域に足を運ぶことができる場所である。そこで、都会に暮らす人々が気軽に自然と触れ合い、環境について意識を向けることができる。山地や丘陵地など、自然が多い地域での自然体験を通して、現在そこを住処としている希少種のモニタリング調査も並行して行うことで、野生動物の保護をすることができる。また、都市部の屋上や道路脇、公園の緑化や池などの保全によって、野鳥や水生生物などの住処が増え、エコロジカルネットワークの保全と回復が期待できる。</p>
37	<p>低地・台地・丘陵地・山地、いずれの地域においても、各地域に存在する各種の教育機関に通う児童・生徒・学生達が、定期的に地域の自然環境（干潟・農地・草地・森林など）に出かけ、自分たちが守り育てる環境として、モニタリングや管理活動に関わる。</p>
38	<ul style="list-style-type: none"> ■ 自然地の新たな開発は見かけない ■ 2020年代に稀少だった生き物は生息地が増えて普通にみられる。また見られなくなった生き物もない ■ 西多摩ではシカの影響が減少し、生態系の重要な基盤である森林が回復し、多様な生き物が戻ってきている ■ 高尾へのシカの進出は食い止められ、豊かな生物相が守られている ■ 伊豆諸島観光が再評価されて盛況で、各島固有の生態系の違いを楽しむのが人気となっている。 ■ 身近な雑草も外来種ばかりだったが、春の七草、秋の七草などが見られるようになり、季節感を感じる ■ 山間、島しょ部に若者が増え、黄八丈などの伝統工芸が継承され、海外からも高い評価を得ている ■ 小中学校の林間学校等で都内山間部や島しょに滞在することが一般的になり、多くの人が東京の自然や地域の魅力を知っている ■ 義務教育では「SDGs」「生物多様性と生態系」「東京の自然」などを履修している ■ 廃プラの画期的な分解技術が開発され、海ゴミにも応用されている ■ AIによる生態系サービスの価値換算が容易になり、分野や行政の垣根を超えた受益者負担により保全事業などがすすんでいる ■ モノの処分・再生に関わる人・企業のイメージや評価が高まり、人気業種になっている。

39	<p>2050年に100周年を迎える秩父多摩甲斐国立公園を代表とする、国内第2位の面積割合（各都道府県全体面積あたりの自然公園が占める割合）である都内の自然公園を中心に、東京の自然と自然を背景とした文化を、観光や一次産業といった経済活動の資源、郷土理解の教材、そして都民の誇りの源泉として地域振興を活発に行い、原資である自然環境の保全への循環につなげている。</p> <p>そして、自然すなわち生態系、それを構成する生物多様性と人間社会とのより良い関与のありようを都民自らが探求し実践する都市として、</p> <p>生物圏保存と持続可能性へのチャレンジとアイデアを、世界に発信し続けている地方自治体になっている。</p> <p>※現在提示されている将来像の基本理念があまりにも普遍的すぎ具体性がない（別に東京都に特化した将来像ではない、世界中どこにでも当てはまるあたりまえなことすぎる）。</p> <p>※特に山地については、行政区にとられず隣接県（少なくとも関東山地；秩父多摩甲斐国立公園内）との連携・協働に重点をおかないと、挙げてある課題（p.49）は解決されない。</p>
40	<p>都市中心部においても、緑が存在し、生態系のネットワークも成り立ち、現在よりもより多くの生物種が生息できるような将来像。</p> <p>都市に近い海においても、より多くの生物種が生息できるような環境づくりのできている未来。</p>
41	<p>千葉県や神奈川県のように充実した都の自然史博物館が造られ、これを中心に各種の組織が連携して、生物多様性保全のための詳細な基礎情報が整備され、それに基づいた保全計画が立てられている将来像を期待します。</p> <p>また、立ち遅れている遺伝子レベルの生物多様性の保全に関して、ゼロドラフトにもある在来の系統と外来の系統との交雑の問題について、具体的な対策が行われている将来像を期待します。</p>
42	<p>東京都内にある公園や緑地が増えて、都民の憩いの場や自然の恵みを享受していることが理解・体験できる場が多くできている。このため、都民の中に、生物多様性保全についての理解が今よりも進み、節度ある自然の利用と生き物を大切にす環境が整備されている都市になっている。</p>
43	<p>ゼロドラフトには2050年の東京の将来像の考え方として豊かな自然が溢れる都市等が記載されているが私の考える2050年の東京の将来像はそこまで明るいものではなかった。目に見えて人が環境問題について考え、行動が見て取れるような状況にならない限り私は2050年の東京の将来像として今よりさらに自然や生物が失われ自然の恵みの感じられないものになっていると考える。</p>
44	<p>東京都の約8万haにもおよぶ自然公園（国立公園、国定公園、都立自然公園）が生物多様性戦略の中心的な役割を持ち、低地から山地までを貫く連続した自然のつながりを作り上げている。人々は、暮らす地域の自然と文化を学び、親しむことで、自然環境の利用と保全のバランスを知り、より良い姿を描き、活動することができる。そして、地域の自然を生かした活動や商品が正当な値段で評価、提供され、地域が活性化する。皆が自然に興味を持ち、過ごす時間や交流が増える。</p> <p>教育に生物多様性のテーマを取り入れ、インクルーシブな考え方で「東京」の自然の持つ魅力を再認識し、国内外の多くの方々にその素晴らしさを体験してもらおうという試みが各所で行われている。</p>
45	<p>人間と自然が共生できる東京。我々人間は、自然をしっかり育み、その恵みを享受できる社会が理想。そのためにも、生物多様性の保全が必要だと考える。</p>

46	<p>東京都は、山地から海洋島嶼まで、高度に都市化された街区から限界集落まで、日本の環境、社会がすべて含まれる。また、渡り鳥の生息地だけでなく、地球上最大のオオミズナギドリの生息地である御蔵島があるなど地球生態系にとっても重要な地域である。したがって、東京都の生物多様性地域戦略は単なる一地域の戦略に留まらず、日本全体の地域戦略のモデルとなるとともに、地球全体の生物多様性保全に対しても重要な戦略であることを認識して策定すべきである。</p> <p>上記も考慮して将来像を作っていくためには</p> <p>1. 全体について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基本理念には「地球規模の持続可能性にも配慮し、」ではなく「地球規模の生物多様性保全へも貢献し」との文言を入れる。 ・国際枠組みの目標との連動を図る。生物多様性保全のポスト2020目標の策定が2022年5月にずれ込んだため、政府レベルの生物多様性保全国家戦略の策定も来年度にずれ込んでいる。これらの国際、国内目標の策定内容と東京都の目標を合わせるように都の策定を進める。 ・内湾および海洋での漁業の在り方も検討に加える。 <p>2. 地区区分について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・P51区分の説明写真。台地を河川（玉川上水？）、低地を干潟の写真で代表させるのは違和感がある。 ・東京都の自然については、地形、地質、土地利用と生物多様性との関係を解説した資料が必要 ・丘陵地から低地共通だが、一般住宅の庭木、生垣、ベランダの植物や昆虫も重要である点が抜けている ・低地のところに水田農地の記述があるが、都内では低地に限らず農地としての水田はほとんど残っていない。特に23区では水田があるのは公園施設だけなので、記載上おかしい。一方で、公園施設の利用形態としての稲作体験と生きもの体験を連動させることは重要である。 ・都市河川の重要性を記載する。事例としては、掲載のものより仙川や野川が適切と考える。 ・多摩川や荒川、江戸川といった大規模河川の河川敷は別途あつかうべきと考える。
47	<p>○生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学・政策プラットフォーム（IPBES）が2019年に作成した「生物多様性と生態系サービスに関する地球規模評価－政策決定者向け要約」によると、生物多様性と生態系の機能やサービスは世界的に悪化しており、このままでは愛知目標やSDGsが掲げる社会や環境に関する国際的な目標の大部分は達成できないとのことである。</p> <p>○気候変動問題と同様、グローバルレベルでは、人間活動の範囲の拡張や強度の増加（以下「人間活動の拡張」という。）が、人間も含めたあらゆる生物の営みの基盤である生物多様性や生態系サービス（以下「生物多様性等」という。）の喪失を招いていると考えられる。したがって、将来にわたり生物多様性等を一定のレベルに保つためには、生物多様性等の喪失の原因となっている我々の社会の在り方自体を根本的に見直す必要がある。</p> <p>○人間活動の拡張は、社会、経済、政治上の様々な背景、要素が複雑に絡み合った結果であると考えられるが、その根源的かつ最大の要因の一つは、際限のない生産及び消費を追求する資本主義を基底とする経済成長という画一的で浅薄な信条に囚われていることだと思われる。したがって、先ずはこの信条から脱却し、人間の物質的な生活レベルを、生態系の再生産能力に見合うものに抑制するべく、節度ある豊かさを目指す新しい理念を構築する必要があるのではないか。</p>
48	<ul style="list-style-type: none"> ●空気と水のきれいな東京 ●環境と生き物にやさしい東京
49	<p>都民一人一人が、身の丈に合った衣食住を心がけ、極力、環境に負荷を与えない生活をしている。こうした取組で、経済活動に振り向けられている土地や水や太陽光などの資源を、本来の生態系、自然に戻していく過程にある。</p>

50	<p>2050年の東京の将来像について、3つ述べる。1つ目は、充実した自然環境である。充実した自然環境は、動物や人に良い影響を与え持続可能な社会を作ることにより大きく効果をもたらす。まず動物にとって自然環境が整うことは、住みやすくなることである。さらに、種類の増加や遺伝子の多様性ももたらさるだろう。動物が豊かになることは、まさに地球に住む生物の共存が上手くいっている状態であると言えるだろう。2つ目は、発展した生態系サービスである。私たちの生活は生物多様性の恵みを多く受けていて、生物多様性の発展は私たちの生活にも発展をもたらす。具体的には、日々使う水質の向上や食料が豊富になることなどが挙げられる。また、文化的サービスの向上は私たちの精神をも豊かにする。生態系サービスは生物多様性を維持していくことで向上させられ、環境にも人にも良い影響をもたらすのである。3つ目は、生物多様性の大切さを多くの人が理解していることである。これは今後の地球にとって大切なことである。私たちは地球がないと生きられないし、環境と人は影響しあって生きている。この事実を環境と人の対立関係で捉えるのではなく、お互いに良い影響を与えていける関係でありたい。また、その方法を探すことこそが私たちのすべきことであると考え。より多くの人が生物多様性の大切さを理解することで、環境と人の共存のための取り組みのレベルを上げることができるだろう。</p>
51	<p>東京都の生物多様性が未来にわたって引き継がれるためには、東京都の生物多様性情報の核となる「自然史博物館」が早急に設置されることが必須と考えています。</p>
52	<p>2050に向けて気候変動を止めることは出来ず、当該変更による生態系の変化も、ある意味地球の長い歴史の中では自然の流れと考える。よって、既存の生態系を守る事に固執するのではなく、ある程度の変化を受け入れる姿勢も必要になる。</p>
53	<p>生き物と共生していくことの重要性を意識できる社会になっていると良いと思います。</p>
54	<p>生物多様性の恵み（生態系サービス）を誰もが認識し、誰かから言われるまたは規制があるからなどではなく、自ら進んで環境配慮行動を取ることが当たり前の世の中になっている。</p>
55	<p>私は現状として、2つの課題があると考えている。一つは東京の自然を「知る」機会が少ないということ、もう一つはその自然を「体験する」機会も少ないことだ。生物多様性の実現を図るには、自然を「知る」「体験する」といった幼い頃からの自然教育が必要だと考える。将来の理想像としては、東京郊外の自然溢れる地域だけでなく、都内などでも、広告などを活用した自然のPRを大々的に行ったり、自然を利用するイベントなどをさらに宣伝していくことが必要だと考える。</p>
56	<p>○2050年に向けて生物多様性保全を都の環境行政の中心課題に置き、生物多様性が守られる範囲での経済活動を行っている将来像（東京および日本全体への波及も含め）を描き、2030年までにOSを取り換えるくらいの勢いで今取り組まなければ、気候変動を含む現在の地球環境の危機に対応することはできない。この戦略策定を機に、生物多様性保全に取り組む体制と予算を投じることは、取り返しのつかないコストを下げることにほかならない。</p> <p>○ごみの排出源での分別を徹底するのに約10年かかったと言われているが、そんなに時間をかけていられない。現状あまりにも生物多様性保全が人間の命・人類の存続にかかわる問題であることが理解されていない。もしくは東京は開発する場所だと思われていて東京の自然の価値を理解されていない。2030年には、幼児・学校教育とタイアップしてスウェーデン並みの環境意識が育成されていることを目指し、森林環境税を使うなどして、公的な環境教育の担い手育成を行う機関を整備してほしい（公社でも良いので）。また、そのためには常々の調査や自然情報の整備が急務である。自然史博物館の研究者などの専門家、東京都レンジャーなどの自然保護のエキスパートを常勤職員としてフルに活用できる体制を作るべき。自然公園のビジターセンターの維持管理などの業務も指定管理制度を脱却し、レンジャーも一体となった、より創意工夫ができる十分な予算を持って管理できると良いと思う。 続く</p>

56	<p>○自然破壊を伴う再生可能エネルギーの推進は殆ど意味がない。開発側のガイドラインを設けて、アセスメント案件以外のものも規制を検討してほしい。再生可能エネルギーは屋根上に設置できるようにできないと言われる理由をつぶしていく、金銭的なインセンティブを創る努力が必要。</p> <p>○陸域や海域の3割を保護地区にするという議論もあるが、生態系そのものを保全する対策や制度を検討すべき。</p> <p>移植は環境保全対策の代償措置の代表的な手法とされるが、保全の意味はない。そろそろ希少種を移植すれば開発できるという制度は見直し、基金を創って地上緑化できず建物緑化する場合などに課金したお金で積極的に保全すべき地域を買い上げて公有地として整備すべき。海域については自然公園の一部以外に自然保護の規制がないのはおかしい。水産資源の保全のためにも、洋上風力や波力発電の影響を考えて国に規制を要望すべきではないか。一方、ブルーカーボンなどの取組もできると良い。</p> <p>○ジビエを盛り上げるなどができるように、伝統肉を推進する民間の団体や学校給食と連携して本土の鹿・イノシシの対策をもっと積極的に行うべきではないか。キョンはただ殺して燃やすのではなく、ペットフードや動物園での利用などを検討してほしい。</p> <p>○上記と反対になるが、都内の学校給食でビーガン・プラントベースのメニューを増やすことで、食べ物を通じた環境教育を実施してほしい（八王子市浅川小学校に事例あり）。</p>
57	<p>・ 2050年より前に、東京都の全部局、全職員、業務受託業者とその従業者全員が、生物多様性の意味と大切さを十分理解し、それを重視して業務を行うようになってほしいです。また、関係者の間で十分な情報や意思の疎通ができる環境が整えられてほしいです。それに、各エリアにおける生物多様性を重視した維持管理の目標が具体的に作られ、それに従って管理され、修正が必要とわかった時にはすぐ修正されるようになってほしいです。</p> <p>現状は、環境省や環境局が生物多様性の重要さを唱えていても、実際の維持管理に携わる建設局や水道局の職員、そして業者・作業員にはまだほとんど届いていないと思います。生物多様性の舞台として重要な、大きな都立公園（とくに直轄管理の公園）や玉川上水沿いの樹林が、安全を理由に無惨に伐採や強剪定されています。公園の植え込みや草原も、そこに暮らす生き物のことを考慮せず、スッキリした景観になるよう刈り払われています。その結果、10年前と比べても生物多様性が大きく低下しました。</p> <p>都職員は3年ほどで異動するため、維持管理に必要な知識と経験を十分積むことができず、また、できなくても大丈夫という意識を生んでいるのではないかと感じています。他の業務も忙しいので、上司や部下とさえ十分な報告・連絡・相談ができておらず、落胆することがよくあります。 続く</p>
57	<p>・ 環境局が「2050年東京の将来像」を描いてみせるだけでは、たとえそれが正しくても、実現はできません。そのどの部分を誰が担当し、どのように実現していくか、という戦略・戦術の具体化が必要だと思います。東京都の土地だけでなく、区・市の土地や民有地も含めた地域全体の生物多様性のあり方を決め、各主体が何をすべきかを明確化し、それぞれの実施状況を注視、評価し、必要ならば正策を勧告できる、部局横断的な権限を持った組織や部署が必要だと思います。2050年にはそういう態勢が実現できていることを願っています。</p> <p>・ また、都民の意見を聞き、それに答え、都が決めた方針を丁寧に説明してくれる部署もできてほしいです。都民の要望・意見は多様なので、実現できることには限りがあると思いますが、広く意見を聞き、丁寧に答える姿勢を貫いてほしいです。そして、可能な範囲でそれを公開してほしいです。それが、都民の間に生物多様性への理解を広く深く浸透させることにつながると思いますので。</p>
58	<p>都市化の発展と自然の共存を目指し、決して人間の利益のためにほかの生き物の居場所を奪わない街づくりを行っていく。</p>

☆多い少ないはあっても、ほとんどの都民が週に1日程度はなんらかの形で自然環境の保全のための活動や活動を支える仕事をして、エコマネーを貯金できる。

☆自然の恩恵を受けた都民（または訪問者）は、恩恵を受けるだけでなく、その保全保護への貢献を必ずセットで行うことが常識となる。（または、他の活動で得たエコマネー貯金を使って恩恵を受けることができる）：現在森林や川・農地などの保全はボランティア頼みが多いが、それでは持続可能ではない。保全保護にかかわることで、より愛着や継続的なかわりとなって、土地もちではないが、自分のフィールドをもつことはとても大切です。

☆商品選択・廃棄選択・公共交通機関利用においてもエコマネー貯金ができる

☆活動を支える仕事の中には、読み聞かせ、体験、体験談なども含む

☆かつて豊かな自然があったころ（もう70代以上の方しか経験はない）の経験談を集める活動なども含む。（平均寿命を考えるともうそんなに猶予はありません）

59 ☆環境アセスメントは、該当する開発についてのみ行われているが、地域全体のバランス、生態的な繋がりに重点がおかれ、都市計画で承認されなければある程度の開発は困難となる。開発のための権利を得るには保全への持続的な出資が条件となる。またアセスメントの意見は子どもの意見もうけつることとなっている。むしろ次の時代を担う者の意見や純粋な視点感覚は大切にされている。

☆持続的に環境保全リーダーが各自治体や基礎自治体の連合で要請され（東京都全体で小学校の10倍くらいの人数を目標に）、東京都では基礎自治体の職員や企業、教育関係者、各自治体で要請された保全リーダーたちの中から、活動や事業実習、提案、会議のセット運営も行えるコーディネーターを公立学校の数を目標に持続的に要請、補充される。

☆自然環境に有害な物質の公表、販売・購入にはペナルティーとしてエコマネーのマイナスポイント制度が実施されきちんと公表・表示されて、消費者が商品やサービスを選ぶときの基準とすることができる。

（加温なのか、ビニールマルチなのか、農薬使用によりランク、できれば運送距離など必要な情報が分かりやすく表示されるとともに点数化されている） 続く

59	<p>☆日常的に（または定期的に）、人がいて自然体験できる場所が各小学校区または小学生100人に1か所くらい公的にまたは補助で設けられ、子どもたちや地域の意見をききながら運営されている。（自然公園だけでなく、堆肥をつくっている畑、川、林、竹林、焚火のできる広場など小さくても身近な場・・・）保全リーダーや地域の人が常設的にかかわって運営。</p> <p>☆持ち主も定かではない森や野地の管理責任を請け負える人や団体とマッチングさせ、保全の手だてが届くようになっていく。</p> <p>☆レッドおよび予備軍の生態について、保全対象地域の人が理解し、生き残れる開発だけでなく、きちんと保護育成できる開発が優先される。移動手段・食物の保護育成。できれば各学校ごとに保護対象や目標があると多くの理解ができる。（2030目標）</p> <p>☆都民が最低1坪の農園をもつことができ、実際に季節にあう作物を育ててみることができ、なまゴミもほぼ処理することができる。2050までには、そのような生活を標準とした住宅整備、都市計画が行われる。またそれと同時に東京都のすぐれた保全メンバーが地方に移住・定住または移動居住して地方でも貢献できるようになる。都内の異常過密状態が解消され、地方居住の方が容易にエコマネーを入手できるしくみが出来上がっている。</p> <p>☆消費エネルギーもエコマネーに換算され、マイナスされる。</p> <p>☆学校での自然観察・体験活動などから、生き物の気持ちになって伝えたいことコンテスト（グループ）や校内予選などあり、子どもたちは体験から感じたことを深めて伝える、それを学校外の人とも共有できる場がある。（子どもたちの純粋な気持ちを伝えたり想像したりする力は、信じられないくらい大きい！）</p> <p>☆現在（2021）の科学的な危機感（かなり絶望的な予測を個人的にはもっています）をしっかりと共有（人数は多くなくても）して残しておく、あのままだったらこんなことが予測されていた、そうならなくてよかったねと2050には大多数の人といっしょに胸をなでおろしたいです。（なんとなく2050を迎えるのではなく）</p>
60	<p>都市を構築する構造物の意匠や、屋上などのスペースに管理できる範囲で自然を取り入れ、人間や在来の生き物が、失われた自然の代わりに新たに自然と接することのできる機会・空間を創造し、都市と自然の融和を図る。都市と自然が融和していることが通常である、という新しい価値観を人々の心に根付かせていく。</p>
61	<p>2050年の東京は保全と回復すべき生物多様性を管理できる態勢になっている。</p> <p>みどりの量と質をはじめ、様々な生物多様性の保全と回復に関わる指標が定量的に目標設定され、その保全と回復の進捗度が測定され、都民・事業者・民間団体・行政など様々な主体が目標と実績のギャップを共有し、適切なアクションがとれる態勢になっている。また、東京都、都内区市町村、更に日本及び世界共通基盤で生物多様性の保全と回復のシステムが運営されている。</p>
62	<p>都民が自然資本となる生態系の価値を認識し、生態系サービスを楽しむためには生物多様性の保全が大切だと認識している。</p>
63	<p>主な課題「東京都の海ゴミ問題」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大量のゴミが海岸に流れ着いている（主にプラスチック） ・魚からプラスチックゴミが検出される <p>（石油を原料とした合成樹脂のプラスチックは紫外線を浴びると耐久性が低下し、風や波の影響などを受けて破片とる。それを魚が食べてしまい種の減少の原因の1つとなる。）</p> <p>将来像</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゴミのない綺麗な海岸を目指す ・プラスチックの誤飲が原因の魚類の減少をなくす
64	<p>2050年には孫に囲まれていることと思います。鳥しょ部や多摩地域の豊かな自然はもちろんです、孫たちに公園や庭木を含め、都心の身近な自然も残していければと思います。</p>

65	開発・消費・発展と自然環境保全の二項対立ではなく、科学技術と伝統的な知識・文化に基づいた様々な環境配慮の方法が生まれていて、個々人の生活の様式や水準、居住地の特性に応じてその方法を選択でき、誰もが持続可能な社会に貢献できるようになっている。
66	東京都の崖線は、貴重な自然が残っているグリーンベルトであり植物種がプールされている場所です。今は、崖線に不法投棄されたゴミが見受けられることがあります。2050年には、ゴミのない緑豊かな崖線になることを希望します。崖線が植物種をプールしていることを住民が理解するために、崖線の植物の種を集めて地域の住民や学校で苗を育てます。同時に地域の種を遠くに逸出させないこともこの取り組みから学びます。地域の中で苗を育てる意義は、これまで生物多様性地域戦略の中では取り扱うことが難しかった遺伝的多様性の理解へとつながります。地域の崖線植生が保全され、地域の種は地域の住民が守っていると思える暮らしを2050年に求めます。なお、崖線は市区町村の境界をまたいでいることが多く、市区町村で分断されないように、取りまとめ役として都が取り組むべき課題と考えています。
67	東京の自然環境が特徴毎に整えられている。 人の手で整える場所と、自然のままに進む場所が分けられており、それぞれの生態系が確立している。
68	外来種問題や里地里山の保全に関心がある。それらに強い環境先進都市となっていて欲しい。関東地方で、東京が率先して取り組まなければ、まわりの自治体はついてこないと思う。
69	次世代の東京が、世界中の生物の持続可能性に配慮した生活様式が当たり前なものとして定着していて、生物を通して季節の移ろいを感じ、文化的な営みも深めていく、そんな豊かな都市になっていることを望みます。
70	東京の各地域で生物多様性の保全活動が多くの方の生活の中に組み込まれ、地域ごとの自然の価値が見直されている。また、気候変動やプラスチックなど世界的に深刻化する複数の環境問題が対立ではなく協調しながら解決の方向に向かっている。
71	緑や生きものが目に入る機会が自然と増えるなど、生活の中で身近に自然や生きものをを感じる事ができる、生きものに対する抵抗感を示す人が減るなど、「生きもの」と共生する、生きものの恩恵を生活に受けているということを感じながら生活することが増えている。
72	「シン・大江戸・東の京」 多様性と持続性を体現し、世界に発信する島嶼国家の共生首都。16から17世紀に、多様な文化的価値と都市技術を生み出し、同時に大自然との共生を実現していた奇跡の世界的大都市・江戸に習う。造り出す持続性ではなく、自然に息を合わせ、文化を受け継ぐ土壌を育むシン・大江戸をつくる。

	<p>私はゼロドラフトの2050年に向けた将来像の中で、「生きものと共生する都市」と「レジリエントな都市」という点が非常に重要であると感じた。</p> <p>東京都は世界有数の都市であると同時に、世界自然遺産となった小笠原諸島をはじめとした多様な自然環境を有する。このような自然環境を保護・保全することは、私達都民の暮らしを守ることに資するだけでなく、自然環境保全を重視している素晴らしい都市として、世界に広くアピールできる。そのため「生きものと共生する都市」を標榜し、実践することに意義があると考えます。「生きものと共生する都市」が広く浸透し、2050年には自分が生活する身近な場所で多くの生きものと触れ合える自然環境が、東京のあちこちにある将来像を考えている。</p> <p>一方、今年、気候変動に関する政府間パネル(IPCC)が公表した第6次評価報告書では、「人間の影響が大气、海洋及び陸域を温暖化させてきたことには疑う余地がない。」とされており、温暖化によるさまざまな影響は今後も私達の生活に大きな影響を及ぼすと考えられる。温暖化対策として、さまざまな適応策や緩和策が進められており、ヒートアイランド現象の緩和として緑地の創出や洪水対策としての雨水浸透枡などがある。緑地であれば在来種を用いることや、小さな面積の雨水浸透枡でも多くの場所に設置することで生物多様性の向上にも資する。「レジリエントな都市」を目指すことは生物多様性と気候変動という問題に対して同時に解決が可能であると考えられる。「レジリエントな都市」を推進し、2050年には安全・安心な生活をおくることができる東京という将来像を考えている。</p> <p>このような2つの将来像を実現するためには、多くの都民の意識を生物多様性に向けることと、生物多様性の向上に資する取組を強力に推進していく必要がある。そのためには、生物多様性を保全する制度や実施機関が必要であると考えます。ゼロドラフトの生態系サービスを基にした将来像は分かりやすく良いと考える。しかし、将来像を実践していくための基本戦略（案）の中に、制度や専門の実施機関等についての計画を提示するなどもう一步踏み込んだ内容が求められるのではないかと考える。</p>
73	<p>響は今後も私達の生活に大きな影響を及ぼすと考えられる。温暖化対策として、さまざまな適応策や緩和策が進められており、ヒートアイランド現象の緩和として緑地の創出や洪水対策としての雨水浸透枡などがある。緑地であれば在来種を用いることや、小さな面積の雨水浸透枡でも多くの場所に設置することで生物多様性の向上にも資する。「レジリエントな都市」を目指すことは生物多様性と気候変動という問題に対して同時に解決が可能であると考えられる。「レジリエントな都市」を推進し、2050年には安全・安心な生活をおくることができる東京という将来像を考えている。</p> <p>このような2つの将来像を実現するためには、多くの都民の意識を生物多様性に向けることと、生物多様性の向上に資する取組を強力に推進していく必要がある。そのためには、生物多様性を保全する制度や実施機関が必要であると考えます。ゼロドラフトの生態系サービスを基にした将来像は分かりやすく良いと考える。しかし、将来像を実践していくための基本戦略（案）の中に、制度や専門の実施機関等についての計画を提示するなどもう一步踏み込んだ内容が求められるのではないかと考える。</p>
74	<p>生物多様性に対する認識が広まり、日常生活・事業活動など、あらゆる活動に対して生物多様性への配慮がされている</p>
75	<p>住宅地周辺には、歩いて行ける範囲に緑豊かな公園や緑地、水辺や農地があり、身近に自然を感じられる生活が当たり前になっている。</p> <p>緑地や農地が”地域の緑地”としてコミュニケーションの中心になっている。</p> <p>地域のスーパーでは、地域・国内の農産物や環境認証商品の販売が一般的になっている。</p>
76	<p>気候変動対策と生物多様性の保全が両輪として機能し、世界をリードする環境のまちとなっていることを願います。</p>
77	<p>人口減少に伴い増加する空き家が緑地や農地に転換され、地域コミュニティの場として活用されるだけでなく、鳥や昆虫などの生き物が増え、都会の自然が回復している。</p>
78	<p>良くて現状維持。愛知目標から見て成功する可能性が低く感じる。達成項目が少しでもあれば良くなる兆しは見えたかもしれない。</p>
79	<p>ひとといきものが調和した生活が日常的に送られている東京であってほしい。自然環境やいきものについて、教育や学習が現在よりも発展し、老若男女誰もが根本的に生物多様性について理解のある東京を目指したい。</p>
80	<p>学校の授業や会社のCSR活動を通して、自然保護ボランティア活動の意義が広く伝わっている社会。</p>
81	<p>東京都は日本の中枢であり、経済的な発展が最も期待される地域だと思います。そのため、低地など経済発展の中心となる地域では今ある自然を守ることでできるだけ生物多様性を破壊しないようにしていることが望まれます。</p> <p>生物多様性の回復を見込むのならば山地や丘陵地などの地域を進めることが今後必要だと考えます。2050年には森林伐採を減らして人工林を利用することで環境の自然な回復を待つことや特定生物の生活環境を整えることが望まれます。</p>
82	<p>緑や水辺などの自然と調和した都市</p>

基本戦略1（生物多様性の保全と回復に関する取組）

1	とにかくこれ以上緑地を減らさない、できれば増やしていく政策を期待します。
2	ボランティア活動で、外来種の駆除、希少種の保護、生態系のデータ（季節象徴）の記録を行なっています
3	国立公園外の都市計画法の白色地区の外来植物の駆除を進めたい
4	都内でも自然公園等の保護区域外で生物多様性保全にとって重要な、いわゆるOECMの抽出を行いたいと考えている
5	江戸東京野菜を家庭菜園で作ることで固定種の存続になり、農家の担い手不足による種の消滅の対策になる。
6	様々なポスターやボードの設置
7	地域で生物等の調査や研究を行っている。都民参加型の記録データの東京都版をつくってほしい。都内の自治体間で生物多様性事業への取り組みがバラバラである。後世に自然環境をつなぐことはとても大切。東京都のさらなる生物多様性普及啓発活動の推進に期待している。
8	侵略的外来生物を市・区単位で防除し、湿地や里山を中心として生物相を豊かにする。貴重な自然環境は保全しつつ、可能な限り自然環境を復元する。河川や港湾の護岸を見直し、住宅地や工場周辺の緑地を回廊（緑道）でつなぎ、生物が移動しやすいようにする。
9	森林の研究者の立場から都市林の植物多様性を適切に把握・評価し、多様性保全のための都市の樹林の管理の在り方について発信していきたいと考えます。
10	市街地の自然が残っている場所はいつの間にか、ごみが散乱していることがある。そこで、市が毎年実施している一斉清掃のイベントなどに積極的に参加して、自然のある場所を守っていきたい。
11	自宅の庭に外来の植物を植えず、在来の植物で楽しむようにする。ただ、外来種や園芸種ではない在来種を選択することが難しいため、子供の頃に親しんだ植物を友人や兄弟からもらって植えるようにする。自然のエリアに行くときも外来種を持ち込まないよう気をつける。自然のエリアも在来の植物で有名な場所に行き、仲間と一緒にその素晴らしさについて語り合う。地域の自然の保全活動を行っている団体に所属し、外来種の駆除や緑地の維持管理の手伝いを行う。巨樹・巨木など貴重な緑は地域からも残すよう声を上げたい。
12	お台場の中にはハゼをはじめとした多くの魚類などが生息している。それを永年に亘り毎月潜水観測し、公開してきた団体がある（当該団体に意見提出を依頼中）。その存在を認知し、活動が継続していけるように支援して欲しい。鳥しょだけでない、見えない水中の生き物にも目を見やって欲しい。芝浦運河周辺では沿岸域の人々にとって運河が貴重な空間となっている。そこに魚影が見えるのである。運河も貴重な生き物の生息場なのだ。水環境課では海域に関して水生生物調査（魚類、鳥類など）を実施し、HPで公開している。かつては河川においても実施していた。区市でも同様に取り組んでいるところがある。これらを広報、活用し、都民に生き物に親しむ一助として欲しい。
13	ベランダで家庭菜園を行っている。たまに虫や鳥がやってくることもある。
14	都市部の小緑地や公園で、生物多様性に配慮した整備・管理を促進したい。多様な人の利用がある場所で取組を進めることで、生物多様性の普及啓発にもつながると思う。
15	<ul style="list-style-type: none"> ・庭に生垣や草地、水鉢など変化に富む緑地を創出し、動植物の生息環境の一端を担う。 ・日常生活で出会った生きものについてその魅力や課題、関わり方のルールも含め、地域のコミュニティなどに向けて発信する。 ・自治体の生物多様性や環境に関する計画策定などについて動向を把握し、必要に応じて意見を出す。
16	生物多様性の保全は、地域を指定して放置することではない。日本レベルの保全戦略でも本手法で保全を戦略とする地域が少なくない。しかしながら日本の自然は人間とのかかわりにより創生されてきたものであり、今後は人間と積極的にかかわることで生物多様性を保全、回復させなければならない。都市緑地における萌芽更新施業など、これまでの文化歴史を鑑みた活動を推進する。

17	<p>学生への教育の中で実際に自然を保護するようなカリキュラムを組む。 プラスチックゴミを出さないようにする。</p>
18	<p>個人で簡単な無農薬野菜作り等を行う。</p>
19	<p>・地域ごとに、自治体のみならず、様々な関係者によるモニタリング調査を実施し、多岐にわたる自然環境情報の収集・蓄積を行う。 ・学校や地域の活動として、各地域における生物多様性の恵み（地元産の食材、生息する野生生物、近隣の都市公園・海上公園など）をマップ化するなど、生物多様性は身近なものであることを知ってもらう。</p>
20	<p>東京都環境局自然環境部計画課 御中 東京都生物多様性地域戦略を策定するという事で、「ゼロドラフト」に興味深く、拝見させて頂きました。しっかりとしたデータと分析に基づく案で、大変素晴らしいものであると感じました。 さて、私は環境アセスメント業務や生態系調査等を行う調査会社に勤務し、東京都においても、多くの調査を実施してきました。その経験から、特に、 (2) 2050年東京の将来像の実現に向けて各主体が進める取組のうち、 ・基本戦略1の取組主体「行政」の(1)の「自然環境情報の収集と蓄積の取組促進」 ・基本戦略3の取組主体「行政」の(1)の「生物多様性に関わる様々な分野の計画や取組と連携」に関連して、以下の2点ほど、ご意見がございます。 意見1：データの有効活用 上記のように、これまでも何件もの都内でのアセスメントや生態系調査等を行ってきましたが、その多くは、建設局発注の案件です（他にも環境局、水道局、港湾局の業務経験もあります）。 建設局と環境局では、簡単には連携ができない場面もあるかとは思いますが、例えば、環境アセスメントの審査会では、建設局の予算での取得データが、環境局サイドと共有されることもあるかとは思いますが。このようにして、共有化されたデータは、果たして、生物多様性向上のために有効に活用されているのでしょうか？ また、必ずしも、環境局とはデータが共有されない建設局業務（建設局に限らず他局や、市町村等の調査業務も含め）も少なからずあるのではないかと思います（例えば、河床整備工事後のモニタリング調査や、建設局管理の公園での生物データ等）。 例えば建設局でのデータ取得は、建設局ならではの目的で取得されたものであって、環境局業務とは直接関わらない、という見方もできましょう。しかし、業務の原資は税金であって、納税者からすれば、「建設局」も「環境局」も他の局も、全て「都」です。したがって、環境局以外の局が、予算を投じて調査で得られたデータは、生物多様性向上のために有効活用されるべきではないでしょうか。 ぜひとも環境局が主導となり、他のセクターが予算を投じて収集した生物多様性に関わるデータを収集・管理し、有効活用されるシステムを構築して頂けるよう、ご要望致します。 続く</p>

20	<p>意見2：東京都発注業務における環境アセスメント・生態系関連調査業務での入札の適正化 毎年、環境アセスメント絡みや生態系関連調査業務が都の各セクターから発注されますが、ダンピングが横行している現状が否めません。受注業者が企業努力によってコストを縮減し、成果の質が維持しているなら問題はないのですが、「どう考えても、この額ではできない」応札額の落札業務が大半を占めています。 となると、考えられることは、 A. 労力投入量を減らし「安かろう悪かろう」業務を行っている、あるいは、 B. 低賃金で、調査員を働かせている、 C. 上記AとBの両方 のいずれかしか考えられません。 これまでに行ってきた業務においても、毎年同じスペックでの調査を繰り返す経年モニタリングなどでは、年によっては、非常に質の悪い成果が見られることが多々あります。上記Aの典型例と考えられます。また、いわゆる調査会社の従業員の給与水準も決して高くはないうえ、始終、調査員が辞めてしまう（ブラックな職場環境の）調査会社の存在の噂も絶えません（B）。 続く</p>
20	<p>このような状況にあるため、きちんとしたデータを取るために必要な「それなりの」額を積算した調査会社は入札で敗れ、不当に低入札応札をした調査会社は、調査員が疲弊しつつ、質の低い調査・解析しか行わない、という事態が、発生している、というのは、多くの調査会社の調査員が認識していることです。長い目でみれば、調査業界の存続も危ぶまれます。 とにかく現状では、例えば環境アセスメントでも稀少動植物種の見落とし、なども多々発生しているのではないかと強く危惧する次第です。 環境局サイドとして、環境局以外の局の調査精度に対して介入・モノ言いが困難であるとはお察しいたします。しかしながら、上記のような、環境アセスメント・生態系調査会社の状況を認識して頂き、環境局主導のもとで、適正な入札が執り行われるよう、各セクターに働きかけをして頂きたく思う次第です。折しも、都の発注業務について、最低制限価格制度が「試行」されています。 https://www.e-procurement.metro.tokyo.lg.jp/documents/pdf20210830184616_1.pdf 「試行」に留まらず、環境アセスメント・生態系調査関連業務でも、全ての業務で、「恒久的に」最低制限価格制度が継続されますよう、はたらきかけをして頂くことを強くご要望する次第です（本来であれば、低入札の「安かろう悪かろう」業務を行った調査会社については、環境局の審査・評価のもとで、「契約履行成績不良」「不誠実な行為」として、指名停止にして欲しい、とすら思っている次第です、個人的には）。 困難な側面もあるとは、思いますが、大切な都の予算が、まともな質のデータを取得するために有効活用されるよう、また、まじめな調査会社がバカをみないよう、御考慮頂けますよう、お願い申し上げます。以上。</p>
21	<p>生態系を考慮した自然保護の徹底や必要性や重要性を的確にする そして、実行をする 進化していく時代においてテクノロジーだけではなく、生物多様性の価値を明確にする</p>
22	<p>森林での現場体験をとおして、後世に伝える活動</p>
23	<p>3つの基本戦略のためには、自然史標本の収集、保管、研究、普及教育の拠点となる博物館と専門職員が必要だと思えます。</p>
24	<p>里山の保全活動など自然環境に関する活動に参加するとともに、都内の自然環境や生態系について理解を深める。</p>
25	<p>都立公園において、生物多様性をコントロールできるか数年単位で検証してみる。</p>
26	<p>資源の浪費にならないよう日常生活に気を付け、自分の体力が続く限り都立公園に於いて生物多様性保全活動に参加するつもりです。</p>
27	<p>自然環境の保全と回復 野生鳥獣の保護管理と希少種・外来種対策</p>
28	<p>庭には在来植物を植えている。</p>
29	<p>庭に水たまりを作り、鳥を呼ぶ</p>

30	特に多摩地域などの丘陵地では、NPOなどを主体とした里山の保安全管理活動が行われてきたものの、水田や雑木林、草地の管理放棄が進み、新たな東京都レッドデータブックでもこうした生態系に生息する生き物の絶滅が進んでいることが報告されている。今後は、NPOなどの地域団体の高齢化が進む中、団体とその地域周辺に位置する各種の教育機関との連携強化を進めることが特に重要だと考える。小学校・中学校・高校、そして大学・専門学校など、各学校種において、里山との関わりをカリキュラムの中に明確に位置付け、持続的な活動を推進していくことが重要である。そのためにも、多摩市などで取り入れられている教育連携コーディネーターの配備・支援をさらに進めていくことも大切だと考える。
31	家族、知人に東京の生態系や生物多様性について知ってもらおう
32	人間を含めた全ての地球上の生命体の特徴、特性、そして相互の関係を広く一般に知って貰う事により、生物多様性の保全、回復を進めて行きたい。人間が自然から離れた存在としているのではなく、中に組み込まれている存在なのだという事を感じとして知って貰いたい。そのために観察会、自然関係会報誌への記事、Webへの掲載などを継続的に進める事により、出来るだけ広い年代、職業の方々に生物多様性への関心を持ってもらいたい。
33	<ul style="list-style-type: none"> ・自然公園法において、その目的に「生物多様性の確保に寄与する」と謳われている自然公園での活動の実践・推進（「東京の自然公園ビジョン」2017.5 東京都 におけるリーディングプロジェクト） ・自然環境情報の収集、鳥獣保護管理や希少種・外来種対策に現場で携わっている人材のネットワークづくり（関係者協働・これまでの活動や情報の引き継ぎ・人材育成） ・保全の中心施設となるべき自然史博物館がない中で、自然公園と公的施設・組織のネットワークによるフィールドミュージアム構想、さらに域外の動植物園・大学などの研究教育機関も含めた準博物館的機能を持つ施設とのネットワークによる実働、情報蓄積の仕組みづくり ・都下及び島嶼部、周辺隣接県での、野生動植物保全・外来種防除活動の実践・情報発信
34	地域で活動している自然環境分野のボランティア団体に所属して保全活動を新しいライフワークにする。
35	自然環境の保全と回復：自然環境情報の収集と蓄積 文京区立の公園で踏み荒らされた23区準絶滅危惧種のニリンソウを発見し、区に保全を要請しました。
36	一定程度の知識を習得して、緑地や公園の維持管理のボランティアになり、自然環境保全のために貢献していきたい。
37	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の自然史博物館としての役割を担うため、自然公園施設での自然環境情報の収集と蓄積 ・「東京の自然公園ビジョン」（2017年5月・東京都）におけるリーディングプロジェクト実施のための自然公園施設の連携 ・自然環境の理解を深め、マナー向上を目指すためのデータの可視化、関係機関の連携、メディアへの働きかけ
38	川のごみ掃除をして、プラスチックが海に流れていかないようにする。
39	<ul style="list-style-type: none"> ・自然環境の情報の収集と蓄積を行うセンターの設置が必要である。都立の自然系博物館の設立が望ましい。関東地方の自治体では自然系博物館を持たないのは東京都だけである。 ・都民参加も含めた長期的なモニタリングシステムをつくる。その時にはモニタリングサイト1000のような国レベルのモニタリングシステムと連携する。 ・野生鳥獣の保護管理においては、(1)東京都の自然保護条例上の保護生物の指定を行ってゆく。(2)個体数管理と生息環境整備の一体的な計画を作成する ・アセスメントおよび事業後モニタリング調査結果の公表とデータベース化を進める
40	<ul style="list-style-type: none"> ●合成洗剤（界面活性剤）を使用しない。 ●油を排水口に流さない。 ●3R（リデュース、リユース、リサイクル）の意識を持つ。 ●不必要にモノを買わない。 ●節電、節水に努める。

41	<p>実家の坪庭で桜や梅、かんきつ類の低木を植栽している。あまりに小さな緑なので生態系に寄与するということがないが、毎年、決まった時期に花を咲かせ、四季の移り変わりを実感し、剪定などの手入れをすることで、毎年の生長を実感する。また、市民農園の活動で、農作業においては害虫であるがモンシロチョウやキアゲハの幼虫、受粉の手助けをするハチや益虫とされるクモ、テントウムシ、大量発生するカメムシやアブラムシ、アリ等と向き合う中で、食糧生産という実際の部分と森林生態系に比べれば貧弱ではあるが都市部における緑という意味では、生態系に寄与している都市農業の意味や折り合いを考える。一方、ハクビシンと思われる被害に遭うこともあり、外来種の問題を身近に感じ、解決法は簡単ではないが、命のあり方に思いを馳せる。こうした関わりを通じて、知識だけではなく問題意識を持ち続ける。</p>
42	<p>私が進めたい取り組みは、今ある自然を守る取り組みである。例えば、地方自治体がポイ捨ての取り締まりを強化し、街や川の自然破壊を抑える政策を立てるといいだろう。また、公園の自然を守るための呼びかけや政策も積極的に行うと効果的だろう。身近な自然を守る取り組みを東京の各地で行っていくことで、東京全体の生物多様性の保全と回復に繋がると考える。</p>
43	<p>基本戦略1を進める上で基盤となる生物多様性情報を蓄積するため、市民科学者との協働による生物相（主に植物）調査を都内各地で実施しています</p>
44	<p>自然が残っているエリアの保全も大切だが、人が多く住んでいる身近なエリアでの自然保護が今後より重要になると考える。</p> <p>何十年に1回の災害に対応するためと、公共工事により少ない自然が破壊されるのは如何なものでしょうか？過去の地震対策でも耐震基準が大きな地震の度に見直され、古い建物は取り壊されていく事が繰り返されています。</p> <p>気候変動により自然災害は過去の記録にない物になる事が予想され、これに対応するには無制限の自然破壊しがなく、自然は不要と切り捨てるのは人間のエゴである。</p> <p>まだ護岸整備が進んでいない小規模河川や樹齢がある大木、未舗装の地面等の保護が都市部の生物多様性には欠かせないと思う。</p>
45	<ul style="list-style-type: none"> ・行政やNPO団体などが行う生物多様性に関連するイベント（里山保全、植樹・間伐体験等）に参加する。 ・自宅の庭で植栽を行い、エコロジカルネットワークの構築に貢献する。
46	<p>日ごろから身近な鳥類の調査をして所属団体の方たちと情報を共有する</p> <p>ごみ拾いをする、団地内や隣接緑地の樹木・植物管理について意見を伝える</p>
47	<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りの自然に常に関心を持ち、日頃からよく観察する。それで見つけたことをネットなどで他の人たちに伝える。 ・近所の公園などで、希少植物の保護、外来生物防除、森づくりなどのボランティア活動を行う。他の人たちも誘う。活動中や観察会で、生き物の素晴らしさや生物多様性の大切さを説明する。
48	<p>東京の自然公園ビジョンを基に今ある自然公園に加えて、より多くの自然公園を増やしていく。都内に生息する生物の特徴を調べ、それらが生活しやすい公園を目指していく。</p>

<p>49</p>	<p>基本戦略の123の違いや境界がよくわからないので、森林ボランティア（2団体所属）や水辺の活動団体または、東京都で養成された環境学習リーダーとして（資格ではありませんが）個人的に実施または提案して実施できそうなことを列挙します。</p> <p>◇子どもの水辺に登録して、川や田んぼの生き物探し、昆虫観察、落ち葉掃き→堆肥を作って畑づくり、自然の工作・染め・川そうじ・外来種退治などの活動をしていて、近隣の小学校からの依頼はコロナ下でもありますが、（水中カメラや）珪藻など観察できる顕微鏡があれば、中高生でも興味をもって、生き物が生きていく土台や環境について体験を深めてもらえると思う。また、定期的な水辺の遊び場開放ができるように、団体の活動を整理して関わりやすい活動については、独立した活動としてかかわれる人を増やしていく。</p> <p>◇落ち葉堆肥生ごみたい肥で畑は迷惑かからない程度の草取りは行い、循環畑作を小規模ながら仲間や自然と遊び隊に参加してくる子どもたちと行っていく。落ち葉はきや堆肥返し、堆肥の中の生き物観察なども。焼芋や地域の林で薪もしくは落下枝剪定枝などで焼芋・芋煮・小麦でパン焼き等土づくり～味わうまで</p> <p>◇ 洪水対策で広げた川は、土手が広くなりジャングル状態に。放置すれば外来種があつという間に席捲してしまう。川そうじしても次から次からゴミが・・・団体だけでなく、遊び隊（年間で募集月1活動）の子どもたちと遊んだお礼に川そうじ、外来種退治を体験してもらうだけでなく、自治会も行っていたが川に入るのは危険だと止めてしまった川そうじから、服装や装備に気を付けて一緒に活動していただける人を地道に増やしていきたい。（・・・すでに自然と関われない、危険に対処できない大人が急増しています。）</p> <p>◇森林ボランティアで伐採した木の多くはその場に積み上げて放置、毛虫だ、蜂だ、老木だと、まちや学校で子どもたちの目の前である日突然大きな木が切り倒される。理由も伝えられないままにということが多々見かけられる。一方二酸化炭素の吸収のために樹木・森林は大切を教えられる。</p> <p>こんな現実を埋める余裕も学校にはないのだろうと想像がつくが、切り倒されて放置されると再び二酸化炭素に・・・はあまり教えられない。温暖化も森林保護も木材利用もきれいことではないのだ。目の前の桜などの木を見ながら「どうする？」と考え、話し合い、調べてみたりしながらやってみる。そんなお手伝いならいくらできるかもしれない。こんなことの繰り返し、きれいごとではないことを少しずつ楽に、容易にしてくれる技を将来考えてくれることにつながると高齢者間近な私には期待するしかないが。 続く</p>
<p>49</p>	<p>◇ 校庭に木を植え、木陰をつくり、草をはやして、何種類のざっ草（雑の字は使いたくない）が確認されたコンテストをやったらどうか？さらに何種類の生き物が確認された？コンテスト。森林ボランティアで傾斜地作業が困難な歳になったら、お手伝いできるかもしれない。植物好きな方は市内にもたくさん埋もれています。</p> <p>◇ 紙漉き体験をしながら、緑多き日本では木から紙をつくるけれど、そんな紙は手に入らないという国も多いこと、草や野菜残渣から紙をつくるしかない国が少なくないことなど話してきたが、だんだん草を燃やしている場合ではない時代がくるかも、燃料として運ぶなら木も炭にする技術が必要かもと子どもたちと炭焼き体験などなど、子どもたちに未来を託したい。</p> <p>◇ 興味のある子どもたちと、身近な生き物の生態について調べ、どんな環境が必要なのかを調べていく活動を広げる（世界中のめずらしい生き物については、報道もあるがそれはヒントにはなるが、身近な生物多様性にはつながりにくい。）。さらに、生き物の生息環境を広げるための開発提案をおこなうことは可能。（ex.蛇が川のり面を登れない、カルガモの子どもたちが田んぼの水路の中でもがいている、・・・</p> <p>◇ 日頃の活動の延長になるかもしれないが、川の活動や森林ボランティアの活動団体で、環境学習リーダーもしくは生物多様性リーダーのような養成講座の実地体験の受け入れは可能。</p> <p>◇ 生協の活動を通して、持続可能な作物・消費材（あえて商品とは呼ばない）について、食べたり利用したりしながら、生産者との交流で分かってくることを伝えていくことはできる。</p>
<p>50</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 近隣のごみ拾い活動に参加 ・ 生物多様性、在来種と外来種の問題などを家族と十分に話し合い、ペットを飼うことの責任をよく認識する

51	基本戦略1～3に共通する内容です。生物多様性の保全と回復のためにこういった取組が本当に効果的・効率的に寄与するかを判断できる知識を習得し、自身が住む自治体の町づくりや里山保全計画にパブリック・コメントで意見を伝え、自身も地域（流域思考）における保全活動への参加、生物多様性に配慮した消費や投資行動、コミュニケーションに取り組みます。
52	<ul style="list-style-type: none"> ・ ツマグロヒョウモン等の気候危機による影響を受ける動植物について個人レベルで観察を続けるとともに、とりまとめてくれる組織があればそこに情報提供を行う ・ 外来植物の駆除を近所で行うことで、近隣住民へ生物多様性への啓蒙を図る。 ・ 東京在来の植物を庭で育てる。
53	<p>「海ゴミの回収・処分、防止対策」</p> <p>まずは、海ゴミの回収・処分が急務である。業者に委託しても良いとは思いますが、都民にこの問題を知ってもらう為にも、民間団体や都民に直接呼びかけて海ゴミを回収・処分するキャンペーンを開催する。（都民に知ってもらうことで防止対策にもなる。）</p> <p>防止対策としては上記の通り周知させる必要がある。従って、SNS発信を積極的に行う。TwitterやInstagram等で都内の海ゴミ問題を公表し、ポイ捨てなどゴミを捨てる行為の抑制を促す。</p> <p>主にプラスチックゴミを減少させることにより、魚類の減少など生物多様性の保全、回復に寄与する。</p>
54	私は趣味で、関東や都内産の在来植物を育てています。（しかし、なかなか手に入りにくいのが現状です。植物のタネや苗を保護・増殖・提供してくれるような制度やセンターがあると嬉しいです）
55	行政は都内の崖線の状況を把握します。
56	雑木林の更新を進め、雑木林としてある姿に整えたい。そして、保全し続けることで、東京のかつての里山の姿を後世につなぎたい。
57	兼業農家をしている。里地里山の外来種対策に取り組んでいきたい。まずは情報の発信や共有から始め、分布地図づくりなどにつなげられないものか。国や研究者が出している外来種の情報は広すぎるので、その東京都版や区市町村版も大切だと考える。 又、在来種であっても、増えすぎた動物に対する個体数調整等の取り組みも欠かせない。
58	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自宅の庭に雨水を活用した小湿地と在来植物のビオトープを創出し、身近な生物の生息の場にします。 ・ 身近な生物の写真を撮影し、生物データベースサービスに情報をアップロードして共有します。 ・ 外来種の駆除活動や里山管理活動に参加します。
59	自宅の庭で在来の鳥が立ち寄れるような環境づくりを試みる。自宅に比較的近いところで、気軽に保全活動ができそうな機会があれば活動に参加し東京の生物多様性保全に貢献する。
60	地域における保全活動や里山へGOへの参加など、自然に触れ、保護へつながる活動に積極的に参加する。
61	1. 小笠原諸島の生物多様性の保全と回復。対象は小笠原諸島の絶滅危惧種。特に、人の生活との軋轢をかかえる生物。世界自然遺産の担保（法律・制度）のはざまの生物。急激かつ広域な外来種対策により生存が脅かされている絶滅危惧種など。 2. 行政機関のコーディネート。絶滅危惧種の保全、外来種対策、人の暮らしの融合政策が必要である。しかし、実際は行政間の縦割りが生物多様性の消失の大きな要因のひとつになっている。法・制度を越境する話合いの場が必要。このために、官民を超えた有機的な協働と小笠原の生物多様性保全の実践基地となる、小笠原生物多様性財団を提案する。
62	私が基本戦略1の中で興味があるのは希少種の保護である。自宅ではさまざまな植物を趣味で育てている。この経験を活かし、東京産の希少植物を自宅で生育し、域外保全に資する取組を実践し、協力したいと考えている。また、こうした取組の中心となる組織があると良いと考えている。
63	身近な動植物に関心を持ち、発信する
64	地域の緑地や農地の保全活動に積極的に参加する。 自宅では雨水浸透柵の設置やコンクリート舗装を透水性のある舗装などに転換するなど、雨水浸透に貢献する。

65	生物多様性に対する認知度が低いことが課題だと感じています。 同じ研究科以外の学生で、知っている人にはほとんど会ったことがありません。 認知度の向上や意識の醸成に取り組んでいけたらと思います。 一過性でイベントを実施しても効果は低いので、継続的に普及啓発に取り組んで行くセンターのような仕組みが必要だと考えます。
66	緑地や農地の保全に積極的に関わる。 鳥や昆虫の集まる植物を勉強し、ベランダなどで栽培する。
67	私たちだけが後世のために動いても後世の人が活動を認識していなければまた悪化していくと思うので、この活動をしていることを広める。
68	これまでに継承されてきた里山や生活様式など、文化的な背景も考慮しながら、体験学習や世代間交流を活用しながら、取り組んでいきたい。
69	植林活動への参加 子供を連れて環境問題に関するセミナー等へ参加

基本戦略2（生物多様性の持続的な利用に関する取組）

1	近隣産農作物を農家直売により購入するよう心掛けている。同様のケースが増えれば、生物多様性への意識は増加すると考える。
2	都市農地の保全を図っていただきたい。
3	多摩木材を利用した日用品があれば買いたい
4	民有地が多く、保全費用の個人負担が大きいので工場緑地などとして企業に活用していただくとか等。
5	江戸東京野菜などの固定種は現在で回っているF1野菜と違い2世代以降の種で採取し育てることができるので、持続的な利用になる。
6	緑視率15%をめざす。
7	私は自然環境保全活動を地域ボランティア活動で取り組む。しかし、様々な点で不足な点が多い。継続的な生物多様性事業地域ボランティア活動の維持管理費サポート・講師費用・活動拠点整備などを東京都で行ってほしい。
8	シイタケのほだ木や薪、炭といった物資を輸入材に頼らず、都内で持続的に再生産できる仕組みを構築する。竹ぼうきやうちわ、竹製の虫かごなど、日本古来の伝承技術を守ることも考慮する。
9	都市の緑について、保全が日々の楽しみ(文化的サービス)につながるよう、身近な自然について楽しみながら保全につなげていく観察会などの啓蒙活動ができればいいと思っています。保全の担い手は都民一人ひとりになるので、市民の意識向上と文化的サービスの一石二鳥がねらえればと思います。
10	木登りやツリークライミングなどちょっとした自然を使って遊べる環境が減っている。安全志向に傾きすぎず、自然を使った遊び場の環境づくりを応援したい。また、近所の農家から野菜を積極的に購入したり、近くの農地を使った自治会による芋掘り大会を継続して実施したい。
11	自宅で緑のカーテンなどで家庭菜園を楽しむ。登山をして自然の中を歩くことを楽しみ、在来の植物や花を愛でる。
12	旬でかつ地元の食材を積極的に購入する。
13	日々の暮らしで生態系サービスを実感することが少ない。 「雨水浸透機能を活用した商業施設（出典：南町田拠点創出まちづくりプロジェクト）」のような普及啓発とセットの事例を増やしていきたい。
14	<ul style="list-style-type: none"> ・ 果樹や蔬菜、ハーブ、山菜などを庭で栽培する。 ・ 可能であれば近所にお裾分けしてその恩恵を共有する。 ・ 農家の直売所や農協などを利用して地域の農業を買い支える。 ・ コンポストで生ごみを堆肥化して家庭菜園に利用する。 ・ 薪ストーブを利用して地域の園芸業や材木業から発生した廃材等を煖房に活用し、化石燃料や電力の消費を抑える。
15	生物多様性が生み出す機能は未だ定量化に遠いが、都市における文化的、人間への審美的な機能は見取れる。今後も花や昆虫など子供から大人まで、日々の生活で生物多様性が生み出し恩恵を与えてくれている機能を保全していきたいと考えている。本戦略で最も重要な施策は教育である。公園や学校で様々なステークホルダーに向け、活動を実施する予定である。
16	水は有限ではないことへの認知度を高める。 マイボトルの持参。洗剤などを使いすぎない、など
17	自宅のベランダで個人で簡単な無農薬野菜作り等を行う。
18	<ul style="list-style-type: none"> ・ 貯留した雨水を、散水や雑用水として利用する施設を増やす。 ・ 身近な緑地で植物（花）の手入れを体験できるような機会を増やす。 ・ 自宅のガーデニングにも在来種や生物多様性に配慮した緑化ができるような情報提供や情報交換の場を増やす。 ・ 都内の学校の給食で、環境に配慮して生産された食材（GAP認証や水産エコラベル認証の食材）を使う。

19	都内農産物製作による地産地消の向上 人々が気分転換、リフレッシュ、リラックスすることが可能となる空間の形成（自然の中における公園や施設等）
20	森林での現場体験をとおして、自然の機能と災害の関係性を伝える活動
21	3つの基本戦略のためには、自然史標本の収集、保管、研究、普及教育の拠点となる博物館と専門職員が必要だと思います。
22	地産地消や多摩産材などの地元の資源を活用する。 また、自然公園にも足を運んで、利用ルールを守りながら、自然に触れる。
23	子供とともに近くの公園で昆虫観察などを行い、自然を楽しんでいる。
24	ゴミ問題を解決する方法の1つとして、外来種によるゴミ処理方法を考案する。
25	東京産の自然の恵みの利用（供給サービス）快適で楽しい生活につながる自然の利用（文化的サービス）
26	・地産地消を心掛けている。 ・ルールを守って自然公園を利用している。
27	地域の農園で生産された野菜を買う 区民農園を借り、子どもに野菜を育て、収穫する体験をしてもらう 身近な自然（保全林など）へ足を運び、テレワークや日常の雑事による疲れをいやす
28	近所の緑地を散歩やジョギングのために利用 西多摩地域でワーケーション
29	都内の様々な自給率を少しでも上げるために、東京産の食べ物や資材を積極的に利用していく。自給率は需要が伸びることで生産量も増加していくと考えるためである。木材など東京産の供給サービスを利用することで、森林の整備が行われ、その地域の生態系の保護が期待できる。また、東京産の農作物を積極的に利用することで、価値の向上につながり、育成する土地の整備や維持につながる。その結果、そこで暮らす野生生物の住処の確保につながったり、雨水の貯水機能の向上にも期待できる。
30	基本戦略1における取組意見と関連して、戦略2においても各種の教育機関での実践が特に重要だと考える。都内の一部の小学校では、森林環境税・森林環境譲与税を活用した森林学習も取り入れられているが、こうした環境学習を積極的に推進し、里山を題材・フィールドとして、その恵みを実感として伝えられるようなプログラムの開発・実践・共有を進めていくことが、次世代の育成という意味でも特に重要だと考える。
31	サステナビリティに配慮した消費を心がける
32	消費活動において、常にそのものがどこから来て、どこに行くのか、採取・使用・廃棄の流れをイメージしながら選択するとともに、それを周囲に伝えていくようにする。
33	・島嶼部のユネスコ世界自然遺産登録に対して、陸域（内地）ではユネスコ生物圏保存地域への登録を目指すことにより、東京都を（第三者の評価を受けながら）人と自然の関係とその持続可能性を実践的に追求するフィールドとする （2010年に登録された甲武信エコパークに関しては、秩父多摩甲斐国立公園の範囲をエリアにしているにもかかわらず、なぜか東京都部分だけ登録範囲となっていない） ・自然史教育を義務教育のカリキュラムに入れることで、東京都の地史・地理的な理解による防災・減災意識、及び3万年以上前から人類の生活跡が残る東京の自然の価値（生物多様性および人と自然との関係性、地域文化の特質）を一般化する
34	自然公園や保全地域、公園緑地などにおける利用ルールを守り、自然を楽しむ。
35	防災・減災等につながる自然の機能の活用：多摩丘陵におけるナラ枯れに伴う倒木や斜面崩壊の災害についての対応策を検討しています。かつての若かった里山が過熟してしまったことによる「過熟里山災害」を防ぐための取り組みが「過熟里山」の周辺の住民の安全のために緊急の課題であると考え、防災・減災と生物多様性保全の両立を目指した取り組みを検討しています。

36	登山やトレイルランニングなどで自然環境の保全に気を付けて山や緑地を利用していききたい。
37	<ul style="list-style-type: none"> ・多摩材などの地域の特産、価値の向上について、質と頻度をあげた広報 ・自分の暮らす自然環境を知り、防災、減災へつなげる学習の試行 ・アウトドアアクティビティ（観光、登山、トレラン、釣り、沢登り、キャニオニング、ラフティング、マウンテンバイクなど）の活動について、持続可能かつ個々の活動の共存方法の検討
38	ハイキングなどで自然公園や緑地を利用し、心身のリフレッシュを図る。
39	・現状分析にもあるように都民の生活を支える農産物の購入において、環境・生物多様性に配慮した産物購入を進める。消費者への広報だけでなく、税制やエコポイントなど政策的な推進策を考える。
40	<ul style="list-style-type: none"> ●地産地消（なるべく近隣農家の野菜を購入する） ●遠出がままならないコロナ禍において、近場の都内の自然を享受し、精神的な充足を得る。
41	市民農園を親しみ、無農薬、有機栽培で野菜を育てている。馬糞等をすきこむ土づくりからはじめ、耕うん、畝作り、植え付け、草取り、芽かき、誘引などの農作業を通して育てる。四季折々の収穫を楽しみ、朝、自らの手で収穫した野菜をその日のうちにいただく。種から育て収穫に至るプロセスを経験することで、普段、体に取り込んでいる食糧を生産している都市農業への理解を深める。また、森林整備や農園のボランティアなどを行うことで、森林や農地の保全に貢献する。
42	進めたい取り組みは、2つある。1つ目は、地産地消の促進である。供給サービスの一つである食材は、生物多様性の恵みである。食べることは生きることに欠かせないことであるため、ここを変えることは大きな影響をもたらすと推測する。現在、オンラインでの買い物が増えて多種多様なものが手軽に手に入るようになっているが、これは輸送の手間がかかるだけでなく、排気ガス等が環境へ悪影響も与える。2つ目は、緑を増やすことである。これにより水質浄化や大気の浄化、騒音の低下という調整サービスの向上が叶う。また、緑は人の身体にも良い影響をもたらす。自然の中で過ごしたり体を動かしたりすることは、人の身体面だけでなく精神面にもプラスの影響を与える。心身ともに健康を維持できることは、生活の質の向上につながると言えるだろう。
43	大学が有する緑地を市民や学生、大学教職員の交流の場と位置づけ、多世代による里山保全と利活用を通して豊かなコミュニティ形成を目指す活動を行っています
44	自然を考える上で当該自然の所有者や管理者との調整が必要になる。河川や道路は国土交通省であったり、他の地方公共団体であったりと権利が複雑で、当該縦割りの行政がトータルな自然環境の保全と言った部分で、阻害要因になっている。諸外国の様に横ぐしを刺すNGO的な存在を活用するべきだ。
45	<ul style="list-style-type: none"> ・地産地消を意識した買い物を行う。 ・市民農園などを活用して自ら農作物を作り、自給自足の生活を行う。
46	あらゆる機会を通じて東京の自然公園の素晴らしさを伝える
47	自然がウエルネス向上につながることを生かし、都内ではなかなか見ることのできない自然（滝や森など）を作ることができる場所を整える。
48	基本戦略1～3に共通する内容です。生物多様性の保全と回復のためにこういった取組が本当に効果的・効率的に寄与するかを判断できる知識を習得し、自身が住む自治体の町づくりや里山保全計画にパブリック・コメントで意見を伝え、自身も地域（流域思考）における保全活動への参加、生物多様性に配慮した消費や投資行動、コミュニケーションに取り組みます。
49	・三宅島で行われているエコツーリズムの考えに基づくエコツアーに参加する。
50	「元海ゴミの集積所の活用」 上記基本戦略1を達成した上での話になるが、海ゴミが無くなった、もしくは少なくなった元集積場の活用を通して都民生活の向上に生かしたい。具体的には、海岸の整備やキャンプ場、公園の造営など都民が楽しく過ごせる施設を作り、活用する。（また、それに伴ってゴミが増加したら本末転倒なので、ゴミ箱の設置やポイ捨て禁止の張り紙などゴミ問題の再発防止に努める。）

51	在来植物を、公共用地（公園、公開空地、まちなかの花壇、企業敷地、街路樹など）で育てたり増やしていきたいです。申請や許可が難しそうなので、行政がそういった調整をしてもらえると助かります。。。
52	住民は、崖線の植物種の種を使って苗木を自宅や学校で育てます。タネの収集にはNPOが協力します。
53	里地里山の自然を活かした六次産業化の実現
54	<ul style="list-style-type: none"> ・地産地消をこころがけ地元の食べ物を旬の時期に楽しみます。 ・放棄水田の復活活動に参加し、実りの恵みを受けつつ、里山生態系を復元します。 ・地元の川や池の水辺、緑地公園などを散策し季節の移ろいや自然の美しさを楽しみ、SNSや口コミで伝えます。
55	自宅の庭のスペースを畑にして野菜を育てる。自宅近くにある野菜の直売所を積極的に利用する。緑のある場所は、雨水が土壌に浸透して都市の機能に貢献することも他の人に知ってもらうよう努力する。
56	できるだけ地産地消を心がけた食生活をおくる。
57	世界自然遺産ならではの公共デザインと建物設計等のハード開発。1人工照明：希少な海鳥やウミガメの生態に適応した光源選択、配置。2. 絶滅危惧種の事故を減らす道路設計（路肩、植え込み、標識、キャンペーン）。3. 小笠原の生物への加害を最小限にするための建物設計基準づくり。4. オガサワラオオコウモリの混獲事故をなくす農業ネット（小笠原独自）の開発。5. 国内検疫の基準づくり：小笠原の生物多様性の保全に不可欠ながら、国としての取り組みが非常に遅れている国内検疫についてたたき台を作成する。
58	私が基本戦略2の中で興味があるのは防災・減災等につながる自然の機能の活用として写真で紹介されている、生物多様性に配慮した雨水浸透施設の設置である。しかし、このような取組は土地の問題をはじめ、個人ではなかなか進めることはできない。そこで、地域ごとにこのような施設を設置し、地域で興味がある人に運営を任せ、防災・減災だけでなく環境教育にも資する取組として実施していきたいと考えている。
59	自宅の庭で野菜や花を育てる
60	地域の緑地や農地の保全活動を通じ、子供の遊び場や地域コミュニケーションの場として活用する。
61	<p>都心から近い東京西部の豊かな自然や世界遺産にもなっている島々が、東京の魅力だと思います。自然資源を活かした観光に取組んでいきたいです。</p> <p>あと、23区内にもたくさんの野鳥が見られるスポットがあり、海外の友人を案内すると喜んでくれるため、将来的には外国人向けのエコツアー（エコガイド）ができないかと考えています。</p>
62	自家用の野菜をベランダや市民農園で育てる。
63	川辺の清掃。生活排水、不法投棄などが目立ちます。綺麗な水でしか生きられない生物に帰ってきてもらうためにも大切と考える。
64	生態系サービスについて体験を通じて理解を深めながら生物多様性に馴染んでいけるような取り組みを進めたい。
65	グリーンカーテンなど自宅敷地に植物などの設置

基本戦略3（生物多様性の価値の認識や行動変容に関する取組）

1	ゴミ排出量の抑制は心掛けているが、物足りなく感じる。
2	ポスト愛知目標では陸域・海域の30%の保全を目指す方向ですが、東京都が率先して少しでも多く保全していただきたい。
3	ボランティア活動を通じた自然保護の普及啓発 自身のSNSを通じた自然情報／自然保護 の情報発信
4	2016年より高知県室戸市生涯学習課で外来植物駆除事業を作っている、本来は地元である小笠原村で作っていたが村も小笠原支庁も全く興味を示さず非協力的であった為 高知県で作る事にした。今年、当該部署を視察し問題なければ全国に普及させたい。過去の経緯もあり都が行うこうした事柄に関しても疑心暗鬼でいる。
5	近代以前の日本人は、「自然を守りたい」という意識を持たずとも、日常生活をおくるなかで「結果的に」生物多様性を保全し、現代まで伝えてきたはずである。生物多様性の価値を認識することも重要だが、そうした価値を持たない人々にあっても、日常生活をおくるなかで意識せずとも生物多様性の保全がされていく、そのような「結果的に自然環境が守られている社会」が日本人には似合っているように考えている。そうした社会の仕組みについて考えていきたい。
6	ツル系の野菜を育てることで緑のカーテンを作り、夏の間はエアコンを使用しなくても涼しく過ごせる。
7	積極的にSNSで広報
8	日常のポイ捨てゴミ拾いの継続（現在、11年目）と、ごみ拾いボランティアSNSを活用した情報発信とボランティア仲間作り。 （犯罪であるポイ捨て行為についての罰則強化（都内均一化）も、関連行政にも提言していきたい。）
9	生物多様性の可視化が必要である。コロナ感染症は自然環境への無秩序な開発活動が影響し、今後も未知のウイルス出現が想定されるが、生物多様性事業の各自治体の予算は低水準である。生物多様性事業は都民生活の基礎を支える生態系サービスの基本である。身近な自然環境を生物多様性林などに指定しサポート、価値ある保全活動を地域ボランティアとともに推進してほしい。
10	海浜や河口部のゴミの見学によって実態を知り、世界へ大量のプラスチックゴミが流れ出ていることを食い止める。汚染を減らすことによって生物多様性が保たれ、例えば海洋資源が守られ、おいしい魚が食べられることを認識する。ゴミの出し方やゴミが減る買い物をするといった行動変容が重要である。
11	一足飛びに「地球規模の課題」というのは地に足がついてなく、市民感覚として実感に乏しいと思います。まずは足元の身近なところでの生物多様性の保全にしっかり取り組むべきです。そういった地道な取り組みの総和が、結果的に地球規模の課題につながっていくものと思います。具体的な取り組みはトップダウンではなく、各現場で理想形を共有したうえでボトムアップで動くのが良いと思います。
12	子供達を自然の場に連れ出して自然に触れた感覚を共有したり、プラスチックごみの分別やレジ袋をもらわないなど日常からできる取組を子供と一緒にやることで、次世代の自然環境に対する大切さをつないでいきたい。
13	自然の大切さについて孫と話をする。友人に身近な地域にも、在来の植物があること、自然の素晴らしさなどについて話をする。
14	生き物に触れ合う機会、場の確保が重要である。水環境課が実施していた区市職員対象の水生生物講演会、水生生物研修会（環境科学研究所が実施を受託）がある。かつて、調査結果を川の調査地点に看板を立てて広報してきた。区市、NGO主催の観察会があるが、都主催の散発的な観察会があってもいいのではないかと（NACSJの事業を参照）。その時、生き物の生き様を楽しく学ぶことで、命の大切さを知ることとなる。学校教育ではとかく手が回らないため、小規模でも数多く実施できるように、環境カウンセラーなどの協力を得るように、都は体制づくりをおこなっていくべきである。また、マイクロプラスチック問題は、生物多様性を阻害する要因の一つである。その課題に対して、私と仲間は、アンケートを作成しQ&Aを続けることで普及啓発を行ってきた。生物多様性の課題は多岐に亘ることを認識して欲しい。

15	外出するときは水筒を持参しペットボトル飲料を購入しないようにする。給水場所が地図上に表示される給水アプリを活用して外出先で給水する。
16	なんとなく生態系サービスが生じていることはわかるが、特に生物に興味がない人にとって、生物多様性の価値を認識しづらいと思う。 生物多様性が高まることで、どのような生態系サービスが、どの程度生じているのかなど、数値なども含めて具体的でわかりやすい表現ができるようにしていきたい。（エコロジカルフットプリントなど）
17	<ul style="list-style-type: none"> ・ パームヤシやコーヒー、カカオ、アボカドなど、海外の生産地を見学に行く。 ・ ごみや下水処理の施設を見学に行く。 ・ 地域の食材を使った地域の商店などを積極的に活用することで、地域の経済をまわすとともに、地産地消をすすめる、消費する製品のライフサイクルコストを削減する。 ・ 量り売りや持参容器による買い物での生活資材の調達につとめ、使い捨て資源を削減する。 ・ 修理やメンテナンスをしながら長く使うコンセプトで設計された製品、廃棄するときの環境負荷やリサイクルのしやすさを考えた製品を選ぶことで、資源の浪費を防ぐ。 ・ 使えなくなった製品を回収するメーカーの製品を選ぶことにより、商品のライフサイクル全体に責任をもつ企業を応援する。 ・ 衣料や靴、家電、生活に必要な道具などを修理・メンテナンスするサービスを積極的に活用して長く使う。 ・ 国産の製品を選ぶことで地産地消を応援する。 ・ 資源やエネルギーを浪費する便利な加工食品や家電製品を活用するより、自ら創意工夫して自分好みにあつらえ、生活自体を楽しむ。 ・ ソーラーパネルと蓄電池を設置して電力を自給することにより、化石燃料の消費と二酸化炭素の放出を抑える。 ・ 不要になったものはごみにせず、フリマやリサイクルショップ、交換サイトやイベント等を活用して必要な人の手に届ける努力をする。 ・ このようなライフスタイルを楽しみながら発信する。
18	取組と異なるかもしれませんが、生物多様性の価値、というものを自分が十分に説明できない状態にあるように思います。希少種保護のために多額の費用をかける必要があるのか、自分自身は納得しきれていません。多くの人に納得されるような生物多様性の価値というものを検討・定義する取組が必要である気がします。
19	東京は人口減少時代にあるが、世界的には人口は増加している。アジア圏ではいまだに億レベルの増加が見込まれている。東京が世界に貢献できることのまず始めは、緑地がいかんして高密度地域で意義があるのか発信していくことである。データをしっかりと解釈し、世界へ、アジアへ、大都市圏における生物多様性の意義を発信していきたい。
20	まずは世界規模で考え、個人レベルで行動するという意識をする。そのためにはそれを実行するための教育が大切であると考え。早い段階で、環境問題に注目したドキュメンタリー映画などを見るなどですることです。まずは今世界で何が起きているのか、その現実を皆が知ることが大切だと思う。
21	マイボトル、マイバックの利用等は当然のことだが、例えばデパートで雨の日に置いているビニール袋も新しいものを使うのではなく、誰かが使った後のものでまだ使えそうなものを使っている。 環境配慮型製品は価格が高い割に使い勝手がよくなかったり、デザインがいまいちだったり等もあり、環境を意識していても、購入までにつながらないことが多い。

22	<ul style="list-style-type: none"> ・都内の学校の給食で、環境に配慮して生産された食材（GAP認証や水産エコラベル認証の食材）を使い、それを題材にして、生徒の学習に活かす。 ・商品を選択する基準に、自然環境に配慮・貢献していることを浸透させるため、どのように配慮・貢献がなされているかを見える化する。 ・どうやって商品が作られているか、短い動画で配信（CMに入れ込む）する。 ・原料から製品になるまで、消費者が体験する機会を設ける。
23	<p>生物多様性や自然環境における教育の時間や場所を設ける</p> <p>アウトドアスポーツなど自然体験を行う経験を若い頃から普及、拡大させる</p> <p>アップサイクルの実現など世界的な問題、課題解決へ視野を広げる</p>
24	森林での現場体験をとおして、実感できる価値の見える化、対価や利益につなげる活動
25	3つの基本戦略のためには、自然史標本の収集、保管、研究、普及教育の拠点となる博物館と専門職員が必要だと思います。
26	<p>マイバック・マイボトルの利用、食ロス削減など生態系への負担を軽減する取組を推進する。</p> <p>また、このような環境に配慮した取組みについて、家族、友人、同僚らと共有するとともに未来を担う子供たちへの普及啓発に取り組む。</p>
27	より環境に配慮した製品（食品等）を購入する。
28	地球温暖化防止のために、二酸化炭素を吸収する生物を利用する方法を考案する。
29	<p>生物多様性に関する普及啓発</p> <p>人材育成と自然環境教育の促進</p>
30	<ul style="list-style-type: none"> ・環境に配慮された製品を積極的に購入する。 ・マイバッグやマイボトルを携帯し、使い捨てプラスチックを使用しない生活に変える。 ・食品ロスを出さないようにしている。
31	子どもが身近に自然に触れられる環境を用意する（自然の多い地域に住む）
32	家庭から排出される二酸化炭素の量を減らすため、断熱性能が高く、省エネな家に住む
33	海外で作られるさまざまな製品などは、そのエネルギー、水、自然の恵みなどが絡み合って作られています。限りある資源やそこで暮らす人の生活は持続可能でなければなりません。私もSDGsの視点で自分の生活のなかで出来ることから少しずつ、家族をまきこみながら取り組んでいます。その意識の浸透がより大事だなと思いました。まさに色々な主体、みんなで取り組むことだと思いました。
34	基本戦略2の取組意見と同様に、教育現場での環境学習を推進することで身近な地域の環境への理解から、さらに日本全体の問題、地球規模の問題へと関心の幅を広げていくことが大切だと考える。
35	家族、知人に多摩地域や島嶼の魅力について知ってもらう
36	1, 2の回答と被りますが、人間を含めた全ての地球上の生命体の特徴、特性、そして相互の関係を広く一般に知って貰う事、目の前にあり使用、消費するものが地球上のどこから来て、どこへ行くのか、自分の行動がどのような結果を呼ぶのかを自然環境に対する知識を普及啓発する事により広めていきたい。
37	<ul style="list-style-type: none"> ・基本戦略1で保全面でネットワークづくりをしている各施設・組織の教育普及面での連携（自然公園と動植物園・大学など） ・義務教育課程に取り入れやすいカリキュラム、教材づくり ・プログラム・ツアーの企画・開発、実践
38	日々の暮らしの中で買いすぎや食べ残しなどによる食品ロスを削減し、世界の生物多様性にも配慮した生活を送る。
39	生物多様性保全に関する情報発信や教育活動を日々行っていますが、莫大な数の都民に対しては、微々たる貢献しかできません。データに基づいたまともな生物多様性保全は、都の人口と予算の規模に応じた地域自然史博物館の設立なくしては絶対に達成できないので、都の自然史博物館の設立に貢献したいと考えています。

40	近所の川沿いのごみ拾いや環境に配慮した食品や製品を選択していきたい。
41	私が進めるべきだと考えているのは基本戦略3である。また私が努めるべき取り組みとして考えているのは自然環境問題に関する教育の普及である。人々が本質的に危機的な状況であると気づかない限り、自然環境の改善や生物多様性の保全は叶うことがないと思うのだ。危機的な状況であるということを「理解」しなければならない。そのために必要なものが教育であると考えてる。
42	<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育のカリキュラム（試験や教養など必須項目）に取り入れるため、指導側への提案と出前授業 ・自然公園と都市公園、ビジターセンター、学習館などの自然学習施設と動物園などとの連携から、教育の質を向上させ、機会を増やす。 ・「東京の自然公園」への総合的なアクセスインフォメーションの取組を小規模な範囲から試行する ・インクルーシブな視点をもつため、障害、性別、年齢などが多様な方が集まる学習機会を増やす
43	認証のついた食品を購入する。自然環境の市民講座などで学習し、生物多様性保全の意義を家族や知人に伝える。
44	<ul style="list-style-type: none"> ・都民への自然・生物の普及教育のセンターを設置する。自然系博物館がもっとも望ましい。 ・学校教育においても、社会、理科などの教科を通して地域の生物多様性を理解するため、カリキュラムや教材、体験学習計画を作成する。
45	<p>○具体的な施策の内容は、国や自治体、NPOやコミュニティなどの各主体が検討するべきであるため、今後必要となる政策的な枠組みを以下に示す。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 人間活動の影響により、既に喪失の危機に陥っている生物多様性等の更なる劣化の回避、回復を図ることを人類の最優先課題であると位置付ける。 2) 資源利用の総量を抑制するため、生物多様性等に係る資源やサービスでの利用可能量を定量的、定性的に明確化した上で、先住民や地域コミュニティの権利にも配慮しつつ、それらの利用の方法、手順等を規制等により制限する。 3) 生物多様性等を確保するためには、それを行おうとする主体の多様性が必要であるため、地域の文化や伝統を尊重するとともに、地域の実情を踏まえ、区市町村やNPO等が、当該地域での環境教育その他の取組を推進できるよう、ローカライゼーションを志向する政策的・財政的な枠組みを設ける。 4) 一部は既に実施していることではあるが、気候変動対策や資源循環その他の地球規模レベルの問題との関連性なども含め、科学的に生物多様性等の価値を総合的に評価し、可能な限り指標を設定した上で、地球規模及び地域でのモニタリングを実施する。 5) 国、地域が取り組む施策については、地球規模で取り組むべきものと地域の実情を踏まえて取り組むべきものがあるため、それぞれのレベル毎に政策パッケージを策定するとともに、適宜、その進捗をチェックし、評価する仕組みを構築する。
46	<ul style="list-style-type: none"> ●地域における保全活動への参加。そこで得た情報の発信。 ●合成洗剤（界面活性剤）を使用しない。 ●油を排水口に流さない。 ●3R（リデュース、リユース、リサイクル）の意識を持つ。 ●不必要にモノを買わない。 ●節電、節水に努める。

47	<p>毎年、ファストファッションを買い求めるのではなく、質の良いものを丁寧に手入れして、長く着用する。ベジタリアンとはいかないまでも、牛肉を食べることを控え、大豆等の植物性たんぱく質の摂取を心がける。所有にこだわらず、その時に必要なスペースの賃貸住宅、例えば耐震補強とリフォームをされた高経年団地に住むなどする。車は所有せず、主に自転車や公共交通機関による移動を心がけ、必要な時はシェアカーを利用する。木製品を始めとした自然素材を優先して選ぶとともに、部屋に風を入れエアコンの使用を控え、気温の低い冬季は冷蔵庫の温度設定を弱とし、室外で食料品を保存することもする。ゴルフのような環境への負荷が高い趣味を持つので無く、身近な緑に触れることに楽しみを見出す。</p>
48	<p>私が進めたい取り組みは、生物多様性の価値を小さい時から認識することである。つまり、生物多様性に関する教育に力を入れることである。教育は、人格形成や思考の確立に大きな影響をもたらすため、習慣や行動の元となる。小さい時から自然体験や学習を通して生物多様性の大切さを理解すれば、それを守るための行動を生涯していけるだろう。また、ただ学習で大切さを理解するだけでなく身をもって自然に触れることで、生物多様性維持への気持ちを自然に強くすることができると推測する。この点において小さいときの自然体験は欠かせないものであると言える。このように、生物多様性の価値の認識を小さい時にすることは行動に影響を与え、生物多様性を維持していくことに繋がると考える。</p>
49	<p>上記の基本戦略1と2で取り組んでいる活動そのものが、“Think globally、 act locally”に繋がっていると考えています</p>
50	<p>本来は行政がやるのではなく、各エリアに住む人々が率先してどのような住環境（自然環境）を望むのかが大切で、そのような意見をくみ取る制度や組織を発展させることが重要になる。一過性の運動では生物多様性の保全と回復と言った長期間のテーマは結果を生み出すことはできない。</p>
51	<p>自然に優しい洗剤を使ったり、ごみを出さないようにするなどできることから取り組んでいきたいです。</p>
52	<ul style="list-style-type: none"> ・気候システム、生物多様性、土地利用、化学物質循環（リン酸・窒素）の分野で、地球の限界を超えつつあると指摘されている。生態系の衰退が気候変動とともに悪化しており、土壌・水資源の枯渇、水質の悪化、生物多様性の低下などの傾向を逆転させていく必要がある。 ・今後は、自然環境の保全に加え、再生の視点（regenerating nature）を重視するとともに、自然を活用した社会課題の解決策（nature-based solutions）なしではカーボンニュートラル実現は不可能であるという視点を強く認識して、ビジネスやライフスタイルなどの社会経済のあり方を根本から見直していく必要がある。 ・近年、食料システムが生物多様性に与える影響について国際的な議論が高まっている。UNEP報告書「生物多様性の喪失における食料システムの影響」（2021年2月）では、グローバルな食料システムが生物多様性の主要因であると指摘している。また、2021年9月の国連食料システムサミットでの行動宣言に示されたように、世界の温室効果ガス排出量の3分の1を占め、生物多様性の損失の大きな要因となっている食料システムの変革に重点的に取り組む必要がある。
53	<ul style="list-style-type: none"> ・行政やNPO団体などが行う環境学習講座を受講する。また、将来的には、自分が次世代の若者などに対して環境学習の機会を提供できるようにする。 ・環境の分野は幅が広く、課題の解決にあたっては多面的に見ていく必要があると考えている。例えば、ドラフトp.39には外来種による生物多様性の危機が記載されているが、セイヨウミツバチなど、人や生態系にとってプラスの面もあるものもいる。環境学習機会の提供の際には、このように多角的な視点から環境問題について考えられるようにしたい。 ・生物多様性にも配慮した商品等を積極的に購入する。その際、販売元の企業のみならず、原材料の調達から商品が店舗に配送されるまでの輸送まで、サプライチェーン全体での取組も考慮した上で、生物多様性に配慮されている商品を購入したい。
54	<p>自然のことを考えた商品選択。エコバッグの活用。</p>

55	<p>記載例のほか、</p> <p>国際会議の発信をフォロー・YouTubeで様々な講演などを聞いて勉強する</p> <p>ごみ拾いをする人を増やせるようSNSなどを通じて情報発信をする</p> <p>ヴィーガン・ベジタリアンの食事を中心とする</p> <p>地産地消を心がけ、特にうなぎと輸入牛肉を買わない・食べない</p> <p>国産大豆・ジビエを選んで買う</p> <p>有機野菜を積極的に利用する</p> <p>名刺等にFSC認証紙やバナナペーパーを選ぶ</p> <p>再生紙・裏紙の利用</p> <p>使い捨てのものをなるべく買わないで、できるだけごみを出さないようにする</p> <p>Buyerarchyを考えて買い物をする</p> <p>できるだけ車に乗らない・カーシェアリングを利用する</p> <p>お買い物には自転車を利用する</p> <p>アクセサリーはアンティークを選ぶ</p> <p>アップサイクルや中古品、レンタルサービスを利用し、新しい資源の利用をなるべく避ける</p> <p>長持ちする洋服を買う 家の中でクールシェア・ウォームシェアをする など</p>
56	<p>地域でとれたものをその地域で消費する地産地消を増やす。生態系の保全や生産、輸送に必要となるエネルギーを削減していく。</p>
57	<p>・株式、商品やサービスを選択する際には、生物多様性についての取り組みを行っているかも購入の選択要素の一つとして重視、より自然に優しい企業を応援する</p>
58	<p>基本戦略1～3に共通する内容です。生物多様性の保全と回復のためにこういった取組が本当に効果的・効率的に寄与するかを判断できる知識を習得し、自身が住む自治体の町づくりや里山保全計画にパブリック・コメントで意見を伝え、自身も地域（流域思考）における保全活動への参加、生物多様性に配慮した消費や投資行動、コミュニケーションに取り組めます。</p>
59	<p>・魚を買う際にはMSC認証のものを選ぶようにする。</p> <p>・コーヒーや紅茶を買う際にはレインフォレスト認証されているものを選ぶようにする。</p> <p>・もし、地域の里地里山の手入れの担い手を要請する講座が行われていれば、それに参加する。</p>
60	<p>「都内だけではなく、世界の海ゴミ問題の共有」</p> <p>海ゴミの問題は都内だけに止まるものではない。世界に目を向けてみると、都内と同じように、はたまたそれ以上に海ゴミを抱えている国や地域もある。従って、この海ゴミ問題を共有し世界的にこの問題の解決に努める。1つの案として、この海ゴミ問題を環境教育に活用する。世界各国と協力し、小学校や中学校の授業の一環としてこの海ゴミ問題の解決を目指す。結果や成果を世界各国の同じ世代の子供達と共有する。（世界を通しての海ゴミ問題の認知はもちろん、子供達への環境教育にも寄与することができる。）</p>
61	<p>草木の育て方について、私自身まだ勉強中ですが、これからも積極的に学んでいきたいです。そういった生涯学習講座とか人材育成の仕組みとか、ないでしょうか？定年後は、逆に、いろいろな人に教え、伝えていきたいです。</p>
62	<p>自分は専門家でもないので情報の発信者にはなれないが、そう言った情報を転送する（リツイートする）ことで、少しでも身近な人々への口コミを広げていきたい。</p> <p>一方で、重要性は分かっているても手が出ないという状況も想定できる（環境には良い商品だが、どうしても高い、取り組みに協力したいが時間はない、など）。生き方の多様化が進むであろう2050年にむけて、生産者消費者両方の理解・努力・譲歩が重要になると考える。</p>
63	<p>崖線は市区町村をまたぐものがあるので、都が中心になって市区町村の情報交換や連携を図ります。博物館や生物多様性・温暖化センターなど専門家を配した拠点を作ります。大きな都市である東京に自然誌博物館が無いことは、グローバルなレベルで残念です。</p>

64	里地里山の継続的な管理の担い手の育成。行政からの支援制度や育成制度はないものか
65	<ul style="list-style-type: none"> ・自宅に設置している太陽光パネルで発電し、また、将来的には電気自動車に購入し温暖化ガスの削減に協力します。 ・過剰包装となる買物をなるべく避けて、プラスチック製の容器の使用量を削減し、使った場合には適切に分別し廃棄します。また野外では絶対にプラゴミを捨てません。 ・生物多様性に関連するイベントに積極的に参加します。 ・ウナギなどの絶滅危惧種の食べ物は、なるべく食べないようにします。 ・生物多様性に関わる活動や団体への募金や寄付に協力します。 ・認証ラベルのある自然にやさしい商品をなるべく購入します。
66	子供と一緒に自然のある地域や環境学習が可能な施設に行って、子供への環境教育に実践する。普段の暮らしの中で地球規模の環境問題に配慮した商品を積極的に購入するよう努める。逆に、環境問題にマイナスの影響を与えている企業の商品は購入しないよう心掛ける。商品購入以外でも、日々の生活の中で、環境に負荷を与えていないか新しい情報も収集し、自らの行動を変える意識を持つ。
67	自然環境に配慮・貢献できるような商品の選択や食品ロス削減を心がけた食生活、買い物に積極的に取り組む。そうした取り組みを家族・友人等に発信していく。
68	基本戦略1, 2における取り組みを、整理して地域における理解・知識を深める。日本国内（やんばる・奄美など）やガラパゴス諸島など生物多様性保全の先進地との交流を深める。小笠原独自の「取り組み」と、「考え方」は、生物多様性の保全を目指す以上、ローカルでも世界に発信しうる実践例となるため、前述の取り組みを実現させながら、小笠原独特の生物多様性の価値の認識を根底する暮らし、公共デザイン、融合政策を、国内、世界にアピールする。
69	私が基本戦略3の中で興味があるのは生物多様性に関する普及啓発である。生物多様性という環境問題は気候変動ほど広くは浸透していないように感じる。そこで、学校教育の場など、地域の子どもへの教育の手伝いなどを実施したいと考えている。また、気候変動を始めとしたさまざまな分野との連携にも興味がある。
70	マイバック・マイボトルを進め、できる限りプラスチックを減らす
71	地域の農産物を積極的に購入する。地域で購入できない食料品については、できるだけ都内・国内、RSPOなどの環境認証商品を選択する。
72	基本戦略1ともつながりますが、生物多様性に対する認知度を高め、環境認証商品の購入（エシカル消費）の促進とか、食品ロスを減らすことが当たり前になるように取組んで行きたいです。
73	地域の野菜をできるだけ購入する。
74	東京を通じて地球規模のスケールに目を向けた取り組みを実施したい。生物多様性を通じて世界で活躍できる人材育成についても力をいれて取り組みたい。
75	環境保全活動に対する意識醸成 自然の大切さ等は誰もが分かっているが、それを維持するための苦労等や実情を肌を持って体感する機会が必要。身をもって知ることにより、自然環境に対しての意識変革をして、ボランティア活動をしたり寄付をしたりと意識を醸成していくことができるのではないかと思います。その為に、東京都は企業や学校と連携して体感する機会を提供していくことが必要と考える。
76	自然環境に配慮した取り組みをしています。例えば近くで買い物に行くときは必ずマイバックを持っていき、最近は大谷選手に憧れて落ちているゴミを拾うようにもしています。些細なことですがこれを身近な人にもやってもらい、そしてまた広げてもらうということが今後進めたい、やるべき取り組みだと思えます。
77	植林活動への参加 3Rの実践 リサイクル品の積極的な購入 化石燃料由来製品の使用減